

松江市文化財調査報告書 第70集



文化財受託
シンボルマーク

宮尾古墳群他発掘調査報告書

1996年3月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団



宮尾古墳群他発掘調査報告書

1996年3月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、平成7年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した（仮称）ニュー学園台団地・（仮称）あじさい団地の造成工事に伴う宮尾古墳群他発掘調査にかかる報告書である。
2. 本発掘調査は、有限会社豊和不動産から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 調査の組織は以下の通りである。

依頼者 有限会社 豊和不動産
主体者 松江市教育委員会
事務局 教育長　　諏訪 秀富
生涯学習部長　　伊藤 博之
文化課長　　中林 俊（平成7年6月まで）
　　　　　　柳原 知朗（平成7年7月から）
文化財係長　　岡崎雄二郎
実施者 財団法人 松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課
理事長　　大塚 雄史
事務局長　　佐藤千代光
埋蔵文化財課
調査係長　　中尾 秀信
調査担当者　昌子 寛光
調査員　　右川 崇

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

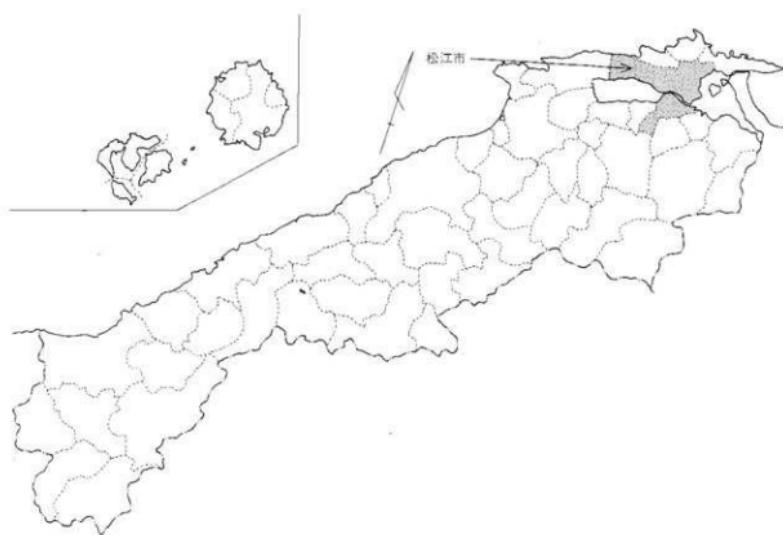
（敬称略）

〔調査指導〕 広江 耕史（島根県教育委員会文化課文化財保護係主事）、足立 克己（島根県埋蔵文化財センター調査第5係長）、柳浦 俊一（同 調査5係主事）、竹広 文明（島根大学汽水城研究センター助手）

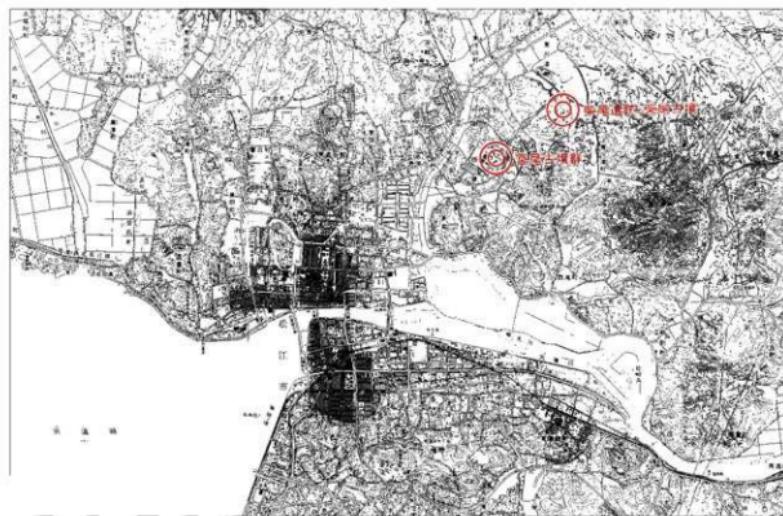
〔写真撮影〕 錦田 剛志（島根県埋蔵文化財センター企画調整係主事）、岩橋 孝典（同調査2係主事）

〔調査協力〕 狩野 忠志（有限会社豊和不動産）

5. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
6. 遺物整理にあたっては、荻野 哲二（松江市教育員会）の協力を得た。
7. 遺構図の浄書は昌子が、また遺物の実測、浄書、本書の執筆及び編集は右川が行ない、昌子がこれを助けた。



第1図 島根県地図



第2図 松江市地図

目 次

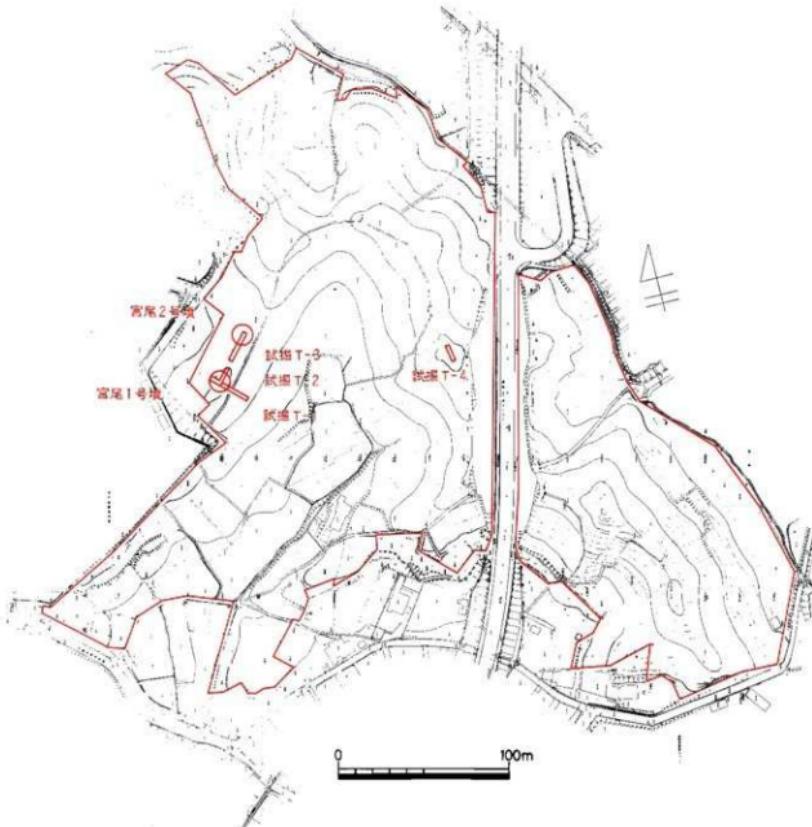
I. 調査に至る経緯.....	4
II. 周辺の地理的・歴史的環境.....	7
III. 宮尾古墳群.....	10
1. 調査の概要.....	10
2. 宮尾1号墳.....	10
3. 宮尾2号墳.....	10
4. 遺物について.....	11
5. 小結.....	13
IV. 柴尾遺跡.....	14
1. A B地区の調査の概要.....	14
2. C D地区の調査の概要.....	19
3. E F地区の調査の概要.....	24
4. 小結.....	28
V. 柴尾古墓.....	28
1. 調査の概要.....	28
2. 遺構について.....	28
3. 遺物について.....	37
4. 小結.....	39
VI. まとめ.....	40

I. 調査に至る経緯

1. 宮尾古墳群

本遺跡は松江市街地東方の西川津町地内の山林尾根に存在する。

この山林一帯において有限会社豊和不動産が（仮称）ニュー学園台団地の造成工事を計画し、平成6年度に分布調査を実施した際、開発区域内山林尾根の東端部で1ヶ所、西端部で2カ所のマウンド状の地形を発見した。その後同年10月において試掘調査を実施した結果、東端部の1カ所は自然地形であると認められたが、西端部の2カ所についてはいずれも人為的な盛土が観察されたため、古墳推



第3図 宮尾古墳群位置図

定地であると判断し、それぞれ「宮尾1・2号墳」と命名した。この遺跡の取扱いについては市教委と開発事業社との協議の結果、現状保存が困難であることから平成7年度において発掘調査を実施することとなった。現地調査は、平成7年4月24日から同年6月6日までの約50日を要して実施した。

2. 柴尾遺跡・柴尾古墓

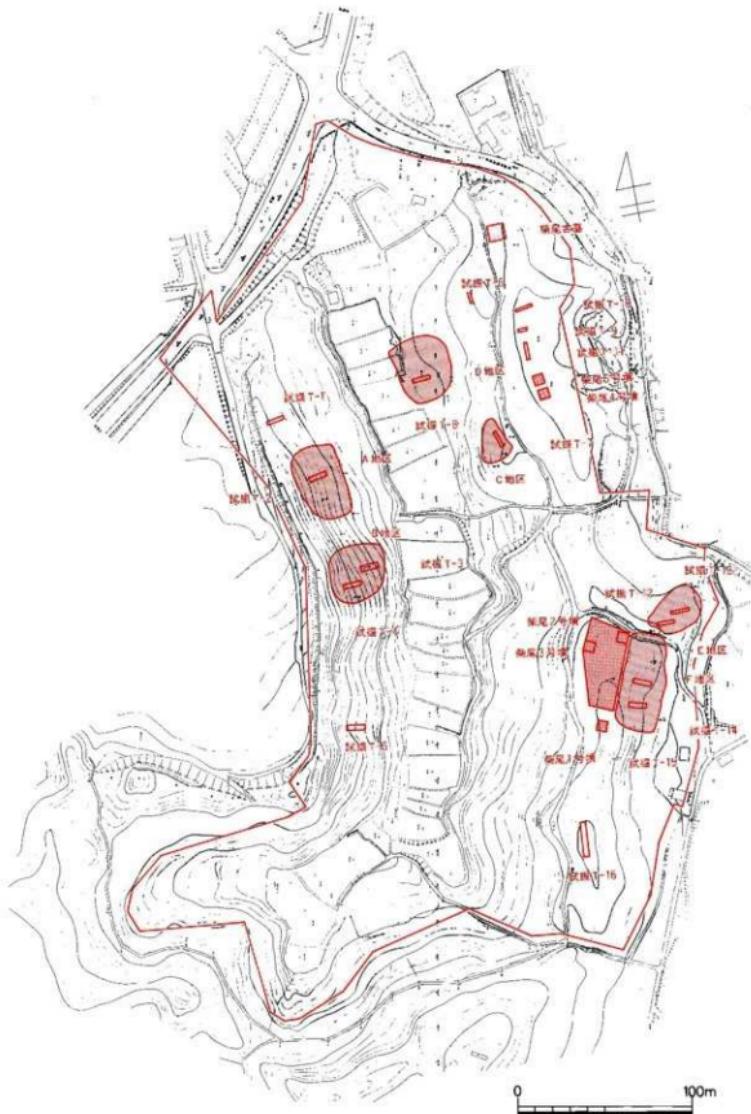
本遺跡は松江市街地東方の上東川津町地内の山林尾根に存在する。

この山林一帯において有限会社豊和不動産が（仮称）あじさい丘地の造成工事を計画した際、平成4年度に分布調査を実施し、開発区域内の東側丘陵地で古墳推定地3カ所と遺跡推定地1カ所を発見し、それそれを「柴尾古墳群」「柴尾遺跡」と命名した。この遺跡の取扱いについては市教委と開発事業社との協議の結果、発掘調査を実施して記録保存することとなり、平成5年度においてこれを実施した。その結果古墳推定地3カ所のうち2ヶ所が古墳であることが判明した（柴尾1・2号墳）。またこの調査の結果新たに古墳の周溝の一部を検出し、「柴尾3号墳」と命名した。一方柴尾遺跡からは縄文時代の黒曜石製石器、剥片が大量に出土し、石器製作関連遺跡であることが判明し、遺跡の範囲がさらに広範囲に広がることが推定された。

この時点で調査計画を変更し、平成5年度には柴尾1・2号墳の全面調査と柴尾遺跡の一部の調査にとどめ、残りは平成6年度の継続して実施することとした。また開発事業社との協議の中で造成工事の区域が拡大する計画が明らかとなり、この区域内にも古墳2基（柴尾4・5号墳）、「柴尾古墓」が存在することから、これらについても平成6年度において併せて実施することとなった。

平成6年度の調査では柴尾3号墳と柴尾遺跡の全面調査と新たに発見された「柴尾6号墳」の全面調査を実施した。また平成6年度には伐開後の分布調査・試掘調査も併せて行い、その結果、開発区域内で遺跡推定地が西側丘陵で2ヶ所、東側丘陵で2ヶ所、東側丘陵の柴尾遺跡東側で2ヶ所が発見されたために、これらと柴尾古墓については平成7年度において発掘調査を実施することとなった。

平成7年度において柴尾遺跡は平成7年6月19日から同年11月17日までの約5ヶ月間と柴尾古墓は同年12月1日から同年12月22日までの約3週間を要して現地調査を実施した。



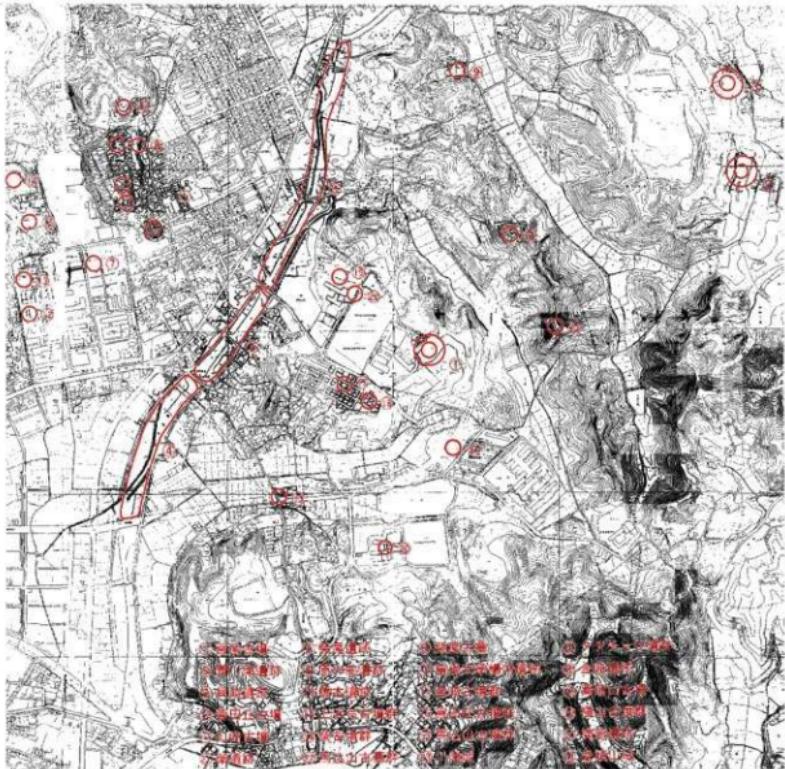
第4図 柴尾遺跡・柴尾古墳位置図

II. 周辺の地理的・歴史的環境

宮尾古墳群は松江市街地の東方西川津町字宮尾の山林尾根に位置し、柴尾遺跡・柴尾古墓も同じく市街地の東方上東川津町字柴尾の山林尾根に位置し、そしてこの地域は旧市街地の東に広がる丘陵地帯である。この3つの遺跡は朝駄川流域を中心とした遺跡の密集地帯の中にあり、この周辺には多くの遺跡が存在する（第5図）。

旧石器時代はこの周辺に明確な遺跡は確認されていないが、タテチョウ遺跡④や西川津遺跡⑤から尖頭器や細石刃核と思われる石器が出土しており¹⁰⁰、周辺に遺跡が存在していたことを窺わせる。

縄文時代は朝駄川下流域の低湿地帯を中心にタテチョウ遺跡・原の前遺跡⑥・西川津遺跡・島根大学校内遺跡⑦・金崎遺跡⑧などがある。これらの遺跡からは明確な遺構が確認されてはいないが、多



第5図 周辺の遺跡位置図

くの遺物が出上している。西川津遺跡からは弥生時代の遺物とともに縄文時代早期末の織維土器をはじめ、前期や晚期の土器が石器とともに大量に出土している¹⁰。またタテチョウ遺跡からも同様に多くの遺物が出土し¹¹、金崎遺跡からは晚期の深鉢形土器が、柴尾遺跡¹²からは早期末と思われる十器片がそれぞれ出土した¹³。

弥生時代は、タテチョウ遺跡・西川津遺跡・原の前遺跡・貝崎遺跡¹⁴・橋本遺跡¹⁵などが存在する。タテチョウ遺跡¹⁶は前期から後期にかけての上器や石器などが出土しており¹⁷、西川津遺跡からは前期から中期にかけての土器・石器・骨角器・木製品などが出土し、遺構として前期の貝塚・中期の掘立柱建物跡などが検出されている¹⁸。またタテチョウ遺跡・西川津遺跡・原の前遺跡から土笛・木製品の櫛・腕輪・管玉のような装身具・分銅形土製品などの特殊遺物も出土し、局部磨製石鎌や木製の農耕具、特に鍔や歯をつけたと思われる柄の部分が大量に出土していることから¹⁹、早い時期に水田農耕が行われていたことを窺わせる。

古墳時代は朝鶴川流域を中心に古墳が集中し、その多くが中期古墳である。金崎古墳群²⁰・薬師山古墳²¹・普田丘古墳²²・上浜弓古墳群²³・宮田丘古墳群²⁴・福山古墳群²⁵・山崎古墳²⁶・柴古墳群²⁷・馬込古墳群²⁸などがある。

金崎古墳群は前方後方墳2基・方墳9基からなる中期の古墳群で、1号墳からは副葬品として須恵器・鉄製品・青銅品・玉類が発見され、また3・5号墳からは埴部や埴輪部から円筒埴輪が出土しており、主体部は竪穴式石室（1号墳）や木棺直葬（6号墳）や土壙（11号墳）などさまざまな形態をもっている²⁹。なかでも1号墳は規模・土体部構造・副葬品の内容から見て、周辺一帯の首長的存在の墓であったと思われる。

薬師山古墳は、中期古墳で土体部は箱式棺様で、須恵器・土師器・鉄製品・彷彿鏡などが出土している³⁰。これらの古墳以外にも中期古墳は上浜弓古墳群（9基）、前期から後期にかけての菅田丘古墳（全長約30mの前方後方墳）福山古墳群（方墳3基）などがある³¹。山崎古墳は一边が19mの中期の方墳で、埋葬施設から埴輪のかけて排水溝と思われる施設をもち、主体部はおそらく割竹形木棺を使用したものと推定される。出土遺物は鉄製品（鉄劍・鉄鎌・鉗）のみである。柴古墳群³²は円墳2基・方墳1基からなる中期古墳群で、旧表土中に土師器片が散在していたり（1号墳）、墳頂部に故意に破碎された須恵器が散在していたもの（2号墳）がある。また初期須恵器が出土したり、須恵器の細片を主体部直上に散布する墳墓祭祀のあり方など注目される点が多い³³。

当時の生活を知るための集落跡の調査はあまり行われていない。そのなかでも堤廻遺跡³⁴は竪穴住居址が21棟（前期3、中期前半7、中期後半9、不明2）、掘立柱建物2棟が検出された³⁵。また柴遺跡³⁶からは5世紀前半頃の土師器が出土する竪穴住居址2棟と6世紀後半頃の古墳の周溝と思われる溝状遺構が検出されている³⁷。

古墳時代以降の遺跡の調査例はこの地域では少ないが、馬込古墓群³⁸は2基の土壙墓が検出され、そのうち2号墓は火葬場所と埋葬場所が同じであるのはこの地方では珍しい形態である。この古墓群は埋葬された錢貨から室町時代のものと推定される³⁹。また川津城⁴⁰や堂頭山城⁴¹などの城跡が確認されているが、そのほとんどは不明であり、どのような内容であったかも不明である。

以上簡単ではあったがこの川津地域の歴史を概観してきたが、绳文時代から古墳時代にかけて多種多様な文化が交錯した地域であり、調査例が多く蓄積されることによって時代の変遷や内容が次第に明らかになってくると思われる。

〔註〕

- (1) 島根県教育委員会 『タテチヨウ遺跡Ⅰ～Ⅳ』 1979～1992
- (2) 島根県教育委員会 『西川津遺跡Ⅰ～Ⅴ』 1980～1989
- (3) 島根県教育委員会 『原の前遺跡』 1995
- (4) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 『柴尾遺跡他発掘報告書Ⅱ』 1995
- (5) 松江市教育委員会 『金崎古墳群』 1987
- (6) 山本清 「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集(人文科学)5号』 1955
- (7) 松江市教育委員会 『山崎古墳』 1984
- (8) 松江市教育委員会 『柴古墳群』 1985
- (9) 松江市教育委員会 『堤廻遺跡』 1986
- (10) 島根県遺跡文化財愛護協会 「柴遺跡」「主要地方松江－境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ」 1976
- (11) 石橋逸郎・近藤正 「Ⅶ 松江・馬込山古墓群」
『島根県埋蔵文化財調査報告書 第Ⅱ集』 1971

III. 宮尾古墳群

1. 調査の概要

平成6年度に行われた分布・試掘調査によって標高23m～26.2mの小高いマウンドが2ヶ所認められ、その南側を1号墳、北側を2号墳とした（第3・6図）。分布・試掘調査で1号墳からは旧表土と盛土が検出され、主体部の墓壙らしきプランや周溝と思われる溝状遺構も検出された。2号墳からは旧表土や盛土は検出されなかったものの、周溝と思われる溝状遺構が検出され、その覆土中から須恵器の細片が出土したことから、平成7年度に調査することになり、地山面まで掘削し各古墳の築造時期・規模・性格を解明しようとした。

調査の結果、1号墳は旧表土と盛土らしきものが認められたが、主体部については検出できなかった。周溝に関しても試掘T-1ではそれらしき痕跡は認められるものの全体的な広がりは見られなかった。2号墳は旧表土・盛土・主体部のいずれも検出できず、周溝も広がりが見られなかった。遺物は分布・試掘調査際に出土した須恵器片以外は近世以降と思われるものであった（第7図）。

2. 宮尾1号墳（第6図、図版3・4）

1号墳は測量調査の結果、南北長約13m、東西長約11m、高さ約1mを測る略長方形の円墳と思われたが、墳丘基盤は上端径約7m、下端径約11mを測る略円墳であった。そして旧表土は平面的には不定形な広がりを見せ、最大で南北長約10m、東西長約8mの範囲で確認されたが、盛土は流出が激しく最大幅で30cm未満を測れるのみであった。

(1) 主体部について

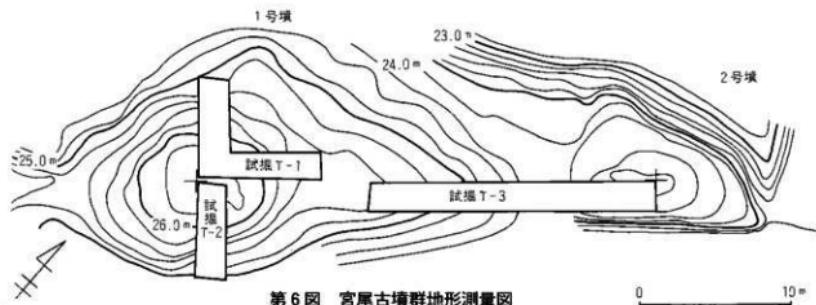
分布・試掘調査の際に試掘T-1で確認された旧表土が途切れた箇所が当初墓壙の掘り込みと思われた。しかし調査の結果、旧表土が途切れた箇所はこれ以外には認められず、墓壙の広がりを示す痕跡も検出できなかった。これらのことから分布・試掘調査の際に検出された旧表土の途切れた箇所は人為的によるものではなく自然的なものと思われる。

(2) 周溝について

分布・試掘調査の際に墳丘の東側で見られた黒色を呈する幅約1m、深さ約15cmを測る溝状遺構は、墳丘の西側にも同様に黒色を呈するプランが確認され、1号墳を巡る周溝と思われていた。しかし調査の結果、周溝を示すプランは検出されず平面的にも広がりが見られなかったことからこの溝状遺構は周溝ではないことがわかった。そしてこの黒色土は墳頂部で確認された旧表土とつながることから旧表土の一部であると考えらる。

3. 宮尾2号墳（第3図、図版5・6）

宮尾2号墳は1号墳の北側約30mのところに位置し、南北長約9.5m、高さ約50cmを測る低いマウ



第6図 宮尾古墳群地形測量図

ンドが認められたが、東西長は山道のため削平されていたため不明である。2号墳は表土直下に地山と思われる赤橙色十層が堆積しており、旧表土・盛土は確認できなかった。そのため明確な墳丘基盤については確認できず、規模・形態についても不明である。

(1) 周溝について

分布・試掘調査の際に検出された幅約2.2m、深さ約30cmを測る溝状遺構は南北に広がると予想されたが、東西の延長線上はともに削平されており、調査でき得る範囲での確認だけとなった。分布・試掘調査の時に検出された段差は墳丘側に見られるものの、西側に行くにつれて次第に不明確となり、床面も同様であった。また分布・試掘調査の際覆土中から須恵器の細片が出土したが、今回床面から密着した状態で現代のものと思われる瓦片が出土したため、このことからもこの溝状遺構は周溝とは断定できないと思われる。

4. 遺物について（第7図）

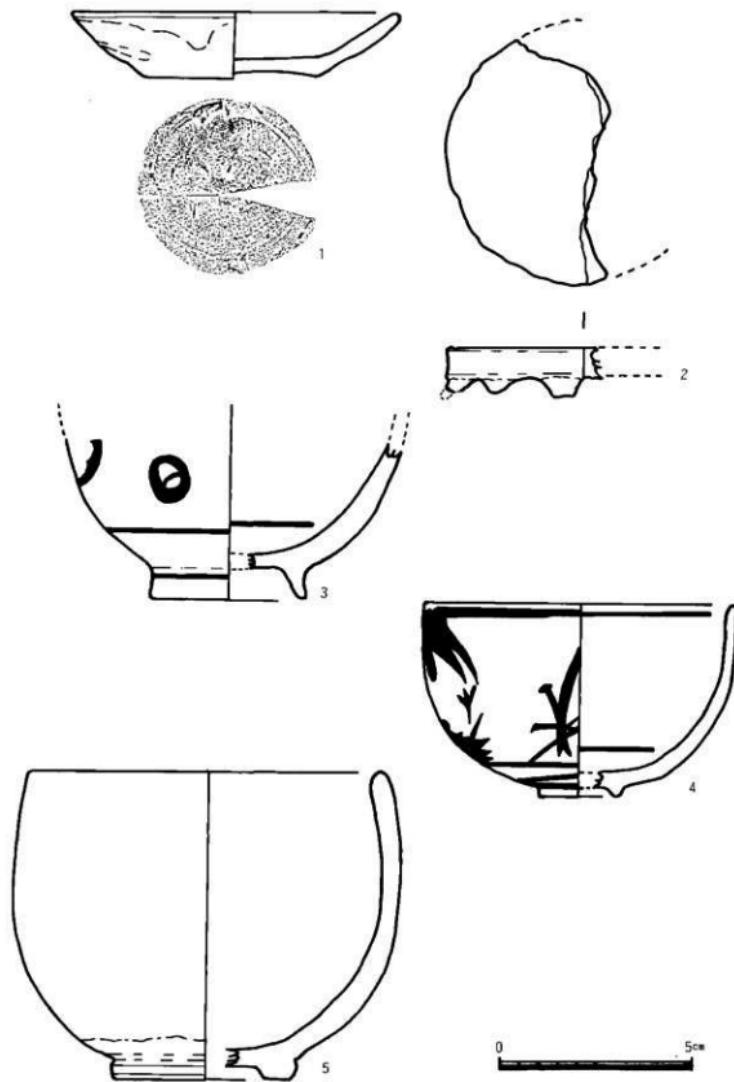
黒瓦片30数点、陶磁器片が10数点出土したが、そのほとんどが表土中からであり、本古墳群に伴う遺物は出土せず近世以降の遺物がほとんどであった。

A. 窯道具（図7-1）

直径7cm、器高1.3cm、厚さ平均0.8cmを測る素焼きの板状の焼台で、1号墳の表土中から出土した。胎土は少し荒く小礫などが混入しており、焼成は良好である。ロクロ成形で内外面とも特に調整は施されていない。色調は茶褐色を呈する。脚は貼り付けで、現状では3本見られるが恐らく6本についていたと思われる。これは形状から窯道具の一種である“脚付板ドチ”と呼ばれる素焼きの焼き台と思われる。

B. 施釉陶器（図7-2）

口径8.5cm、器高4.5cm、底径1.7cmを測る皿型の施釉陶器で、2号墳の表土中から出土した。胎土は



第7図 宮尾古墳群の出土遺物

1. 施釉陶器、2. 焼台、3・4. 磁器、5. 陶器

緻密で焼成も良好である。ロクロ成形で内外面とも回転ナデ調整され、底部には回転糸切り痕が残り内調整された痕跡はない。色調は外面が赤褐色で、内面は釉薬のため淡赤紫色を呈する。釉調は内側は薄く均一で、外面は口縁部のみ施されている。

C. 磁器碗（図7-3）

底径4cmを測る染付の磁器碗の底部片で、2号墳の表土中から出土した。胎土は緻密で、模様は内面の底部付近に一重円で区画された中に文様が描かれ、外面には高台部と胴部下にそれぞれ一重円区画が、また胴部中央には梢円形や梅と思われる花柄が描かれている。形態や模様から18世紀後半以降の肥前系磁器と思われる。

D. 磁器碗（図7-4）

口径4cm、器高5cm、底径2cmを測る染付の磁器碗の底部片で、2号墳の表土中から出土した。胎土は緻密で、模様は内面の底部付近に一重円、口縁部付近に二重円区画が描かれ、外面は高台部・口縁部にそれぞれ円区画が、胴部には竹林と思われる模様が描かれている。形態や模様から18世紀後半以降の肥前系磁器と思われる。

E. 陶器碗（図7-5）

口径9.2cm、器高7.9cm、底径2.4cmを測る陶器碗で半分欠損しており、2号墳の表土中から出土した。胎土は緻密で焼成は良好である。ロクロ成形で内外面とも回転ナデ調整されている。形状は高台脇がわずかに削り出されて丸みを帯び、脇部中央で最も膨らみそこから口縁部に向かっては内側にわずかに内湾する。釉調は内外面とも薄く均一に施されているが、高台部には施されていない。色調は釉薬が施されているところは淡緑白色で、施されていないところは赤褐色を呈する。これらの特徴から地元産の19世紀以降の布志名焼系統のものと思われる。

F. 須恵器

分布・試掘調査の際、2号墳の周溝と思われた覆土中から出土した厚さ平均0.4cmの坏蓋の破片だが、細片のため器種や時期の特定には至らなかった。

5. 小結

宮尾占墳群の存在する現在の地形は、北側と東西方向が山道の造成によって削平・改変されており、特に1号墳は南から北側に向かって盛土の流出が激しく、現状の地形からは1・2号墳とともに占墳であるとは言い難い状況であった。調査の結果、1号墳では旧表土や盛土が認められるが、2号墳では旧表土・盛土とも確認できず古墳でない可能性が非常に高いと思われる。周溝についても床面に密着する形で現代瓦が出土したことや、最近まで山道の造成や開墾などが行われていたと思われることから最近の造構もしくは自然的変化によるものではないかと考えられる。遺物も須恵器以外は近世から近代にかけての遺物であり、表土中の出土ということから、本古墳群とは何ら関係がないと思われる。恐らくこの周辺が近年まで開墾等がなされていたことから、近年の廢棄などによるものと思われる。

一方、旧表土や盛土が認められた1号墳からは主体部が検出されず遺物が出土しなかった。これと

同様の調査例は松江市西川津町の柴1号墳⁶や上乃木町の向原1・3・4号墳⁶などがある。柴1号墳で周溝等の外部施設が検出されなかったことは本古墳と同じだが、墳丘基盤の旧表土中に大量の土師器片が散在していた。向原1・3・4号墳では周溝は確認されており、1・4号墳の周溝からは若干の須恵器片・土師器片が出土しており、3号墳は柴1号墳と同様に墳丘基盤の旧表土中から赤生土器片が多量に出土した。これらは本調査例とは多少異なる点があるが、これらがどのような意味を持っているかは不明である。また本古墳群の周辺には柴古墳群・山崎古墳・馬込古墳群などが存在するが、それらとの関連についても明らかではなく今後の調査例の増加を待って再検討する必要があろう。

〔参考文献〕

- (1) 濑戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史篇 五』 1994
- (2) 松江市教育委員会『柴古墳群』 1985
- (3) 松江市教育委員会「Ⅶ 向原古墳群」『松江園都市計画事業乃木土地区調整事業 区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1983

IV. 柴尾遺跡

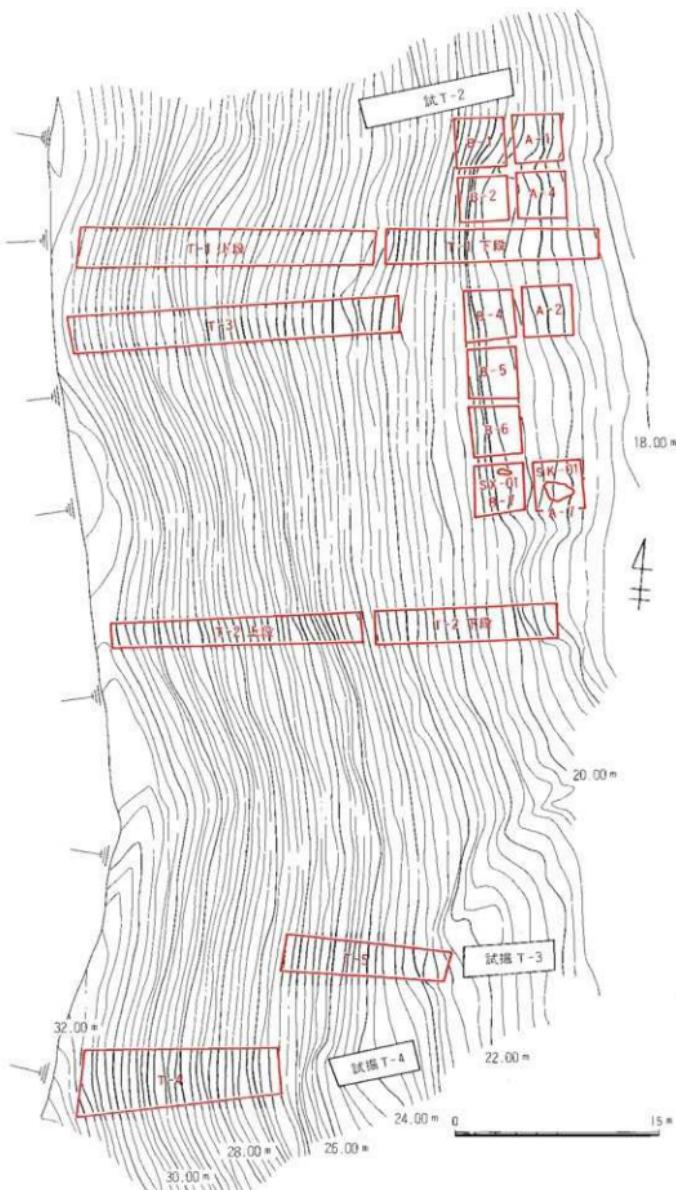
平成7年度の調査は、平成6年度の分布・試掘調査の結果に基づき、調査が必要となった3地区（A B地区・C D地区・E F地区）の調査を行った（第4図）。なお調査トレンチ（試掘溝）の名称は、分布・試掘調査のトレンチは“試掘T-O”、本調査のトレンチは“T-O”とした。

1. A B地区的調査の概要（第8図、図版7・8）

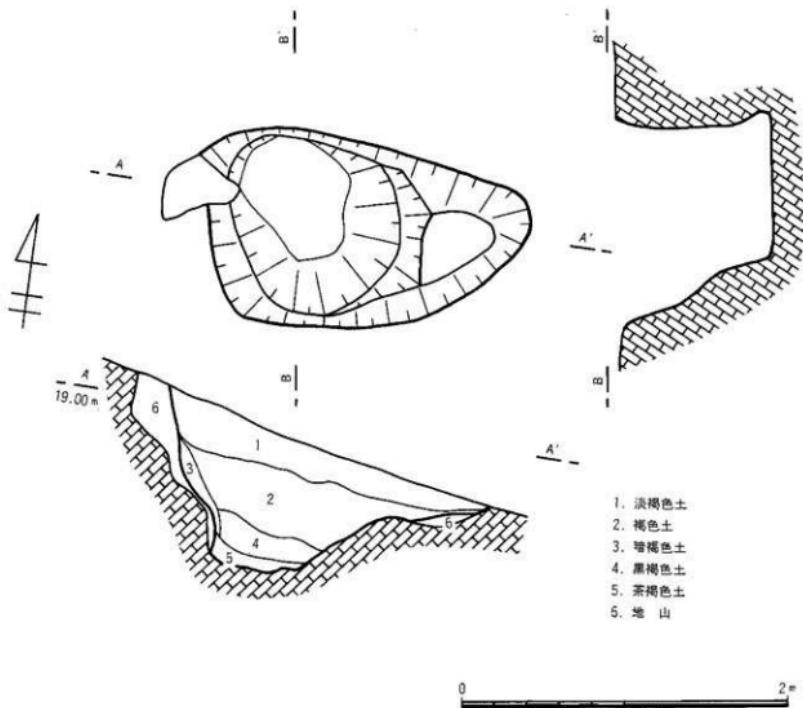
A B地区は広さ約65m×34m、標高18m～33mの緩傾斜の地形で、所々の小さな平坦地が見られる。まず調査トレンチ（試掘溝）は遺構の有無の確認とともに、この斜面の地層の流れや堆積状況を把握するために斜面を横断する形で4本設定した（T-1・2）。また斜面途中の平坦地にも遺構の有無の確認のために調査トレンチを設定した（T-3～5）。そして広い平坦地のある裾野には12m×28mの範囲に4m×4mグリッドを設定した（第8図）。

土層の堆積状況として斜面上部は表土直下が地山と思われる赤橙色土層が堆積していたが、中央部では表土直下に黄灰色土層が堆積しその下層に風化岩を含んだ赤橙色土層が堆積していた。また一部だが裾野部のほうでこの黄灰色土層がかなり厚く堆積していた。

遺構としては本地区ではA-7グリッドから土壙1基（SK-01）とB-7グリッドから集石遺構1基（SX-01）が検出されが、斜面からは何も検出されなかった。また遺物も斜面からはほとんど出土せず、裾野部から土器片や須恵器片が多数出土した。



第8図 A-B地区地形測量及び調査成果図



第9図 SK-01実測図

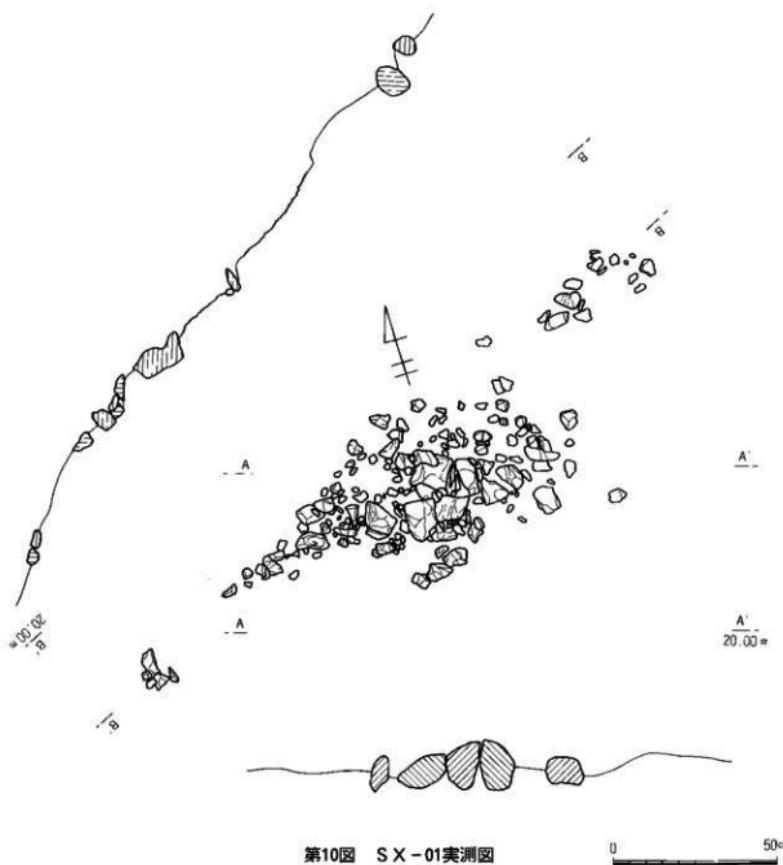
(1) 遺構について

A. SK-01 (第9図、図版13~15)

A-7グリッドで検出されたもので、地山と思われる赤橙色上層から掘り込まれている。形状は現存で上部が長径約200cm、短径約120cmの楕円形状で、底部が直径約80cmの略円形を呈する。東側の壁が緩やかに伸びているのは恐らく壁が崩落して崩れたものと思われる。遺物は検出面から覆上第1～2層にかけて大形（大きさ30cm以上）の石や中形（大きさ10～30cm以上）の石が大量に出土したが、それ以下の層では出土数が減り小形（大きさ10cm以下）の石が出土するのみで、床面からは全く出土しなかった。石は加工されたような痕跡はなく、河原石のような丸い石でもなく角張った石ばかりであった。石以外の遺物は出土しなかったため、時期・性格についての詳細は不明である。

B. SX-01 (第10図、図版16~18)

B-7グリッドで検出されたもので、地山と思われる赤橙色上層面から検出された。東西約160cm、

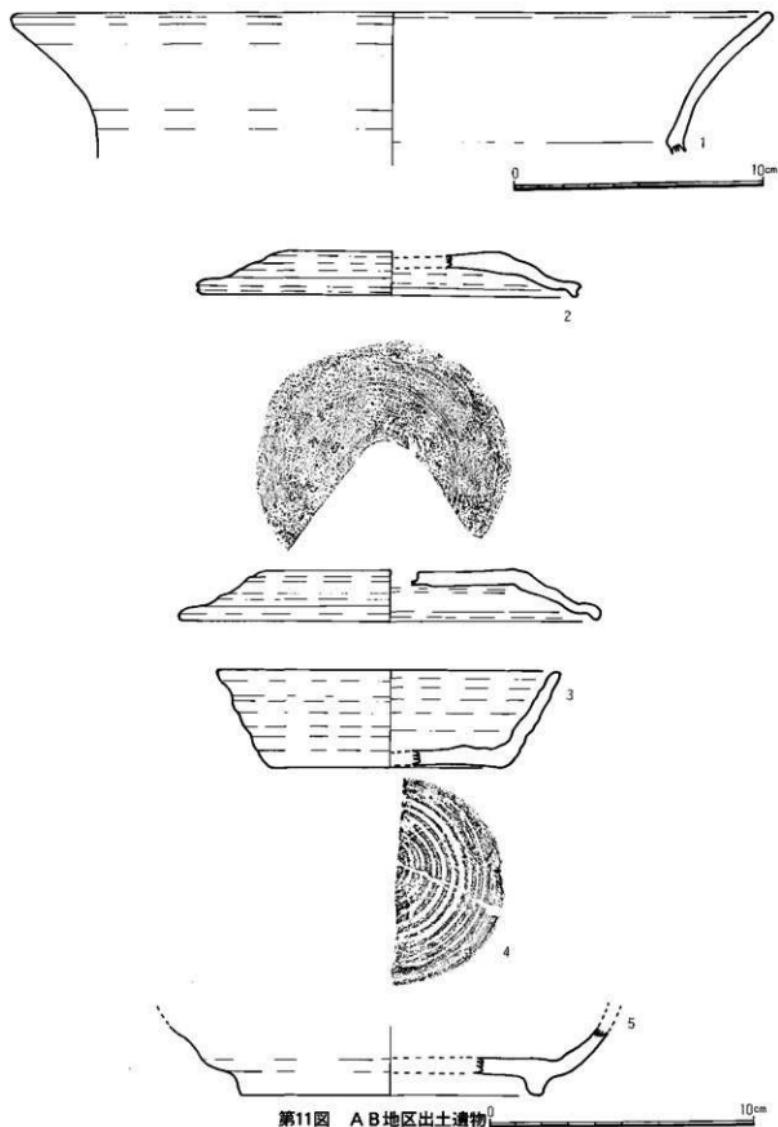


第10図 SX-01実測図

南北約60cmの範囲に石が広がり、特に中央部の東西約100cm、南北約50cmの範囲に集中している。石はほとんどが小型の石で加工された石は見られなかった。検出面より下の石は風化岩と混じり、集石の石と見分けがつきにくくなつた。そしてSX-01の石をすべて取り除くと、石が集中していた下面に、東西約100cm、南北約50cmに渡って橢円形状に黄灰色土が認められた。ここでも石以外の出土遺物はなく、また焼土なども検出されなかったことから時期や性格についての詳細は不明である。

(2) 遺物について (第11図)

本地区から出土した遺物の大半は裾野部の平坦地から出土したものであり、斜面からはほとんど出



第11図 A-B地区出土遺物

1. 繩文土器、2・3. 壺蓋、4・5. 壺

土しなかった。しかも平坦地の出土の大部分は第1～2層からであり、しかも出土した土器片や須恵器片は小片で摩滅が激しいため斜面上部方向からの流れ込みと思われる。SK-01やSX-01から出土した石以外に遺構に伴う出土遺物はなく、ここでは石以外の実測可能なものを紹介する。

A. 繩文土器（第11図－1）

B-6グリッドの表土層から出土した浅鉢もしくは浅鉢と深鉢との中间形態と思われる口縁部から頸部にかけての破片である。口径は15.2cmを測り、胎土は非常に荒く、白色・ガラス質の砂粒や雲母を多く含んでいる。焼成はあまりよくなく表面は若干剥がれ落ちており、色調は淡褐色を呈する。頸部には指圧痕のような調整痕が残っている。形態や胎土、そのほかの特徴から繩文時代晩期の精製土器と思われる¹⁰。

B. 須恵器（第11図－2）

A-2グリッドの表土層から出土した壺蓋で、天井部径8.1cm、口縁部径14cm、器高1.4cmを測る。胎土はわずかに白色砂粒を含むが緻密であり、焼成も良好である。天井部内面には多方向のナデ調整が、体部には回転ナデ調整が施されている。また天井部外面には回転糸切り痕が見られる。口唇部にかえりがほとんど見られず、内側に向かってまっすぐに脚が伸びてつまみがつく形態と思われる。

C. 須恵器（第11図－3、図版34）

A-1グリッドの表土層から出土した壺蓋で、天井部径9.1cm、口縁部径16cm、器高1.9cmを測る。胎土は白色・黒色、ガラス質などの砂粒を多く含んでいため荒く、焼成もあまりよくない。ロクロ成形で、天井部内面に多方向のナデ調整、体部には回転ナデ調整を施している。また天井部外面には回転糸切り痕が見られる。口唇部にはかえりが見られず内側に向かってまっすぐに脚が伸びてつまみがつく形態と思われる。これは天井部の中心に直径約2cm程度の穴が見られ、おそらくつまみの“ほぞ穴”と推定される。

D. 須恵器（第11図－4）

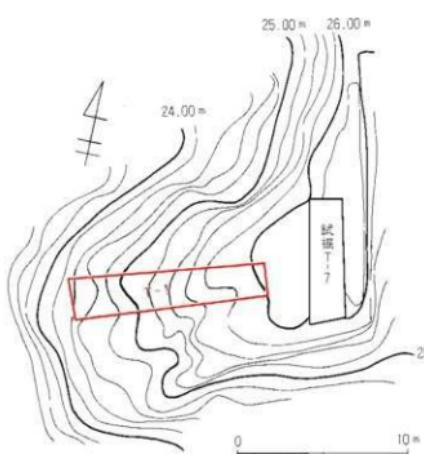
B-5グリッドから出土した壺の口縁部から底部にかけての破片で、口径12.7cm、底径8.6cm、器高4.6cmを測る。胎土はわずかに白色・黒色の砂粒を含むが緻密で、焼成も良好色調は灰色を呈する。底部中央はわずかに凹み、調整は回転ナデ調整が施され底部外面には回転糸切り痕が見られる。

E. 須恵器（第11図－5）

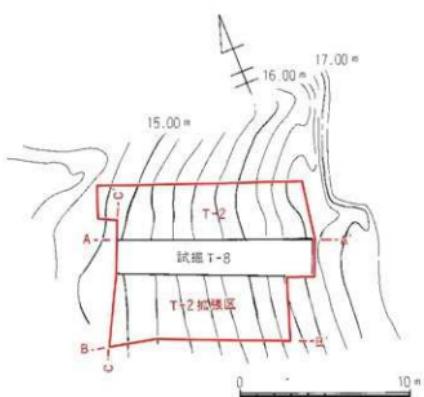
A-2グリッドの表土層から出土した高台付の壺の底部片で、底径11.4cmを測る。胎土は白色・黒色の砂粒を多く含んでいため荒く、焼成もあまりよくないために磨耗が激しい。底部内面には多方向のナデ調整が、体部には回転ナデ調整がそれぞれ施されており、底部外面には回転糸切り痕が見られる。底部外縁には貼付高台を持っている。

2. CD地区の調査の概要（第12・13図、図版9・10）

CD地区は柴尾4・5号墳の丘陵地の南西側にある微高地のC地区（第12図）、北西側の西向きの東丘陵地斜野のD地区（第13図）に分けられる。C地区は広さ約20m×18m、標高23.4m～26.2m、D地区は広さ約20m×22m、標高14.6m～17.2mの緩傾斜の地形である。分布・試掘調査では試掘T-



第12図 C地区地形測及び調査成果図



第13図 D地区地形測及び調査成果図

またT-1に見られるように表土直下が地山ということから、これ以上遺構はないと思われる。

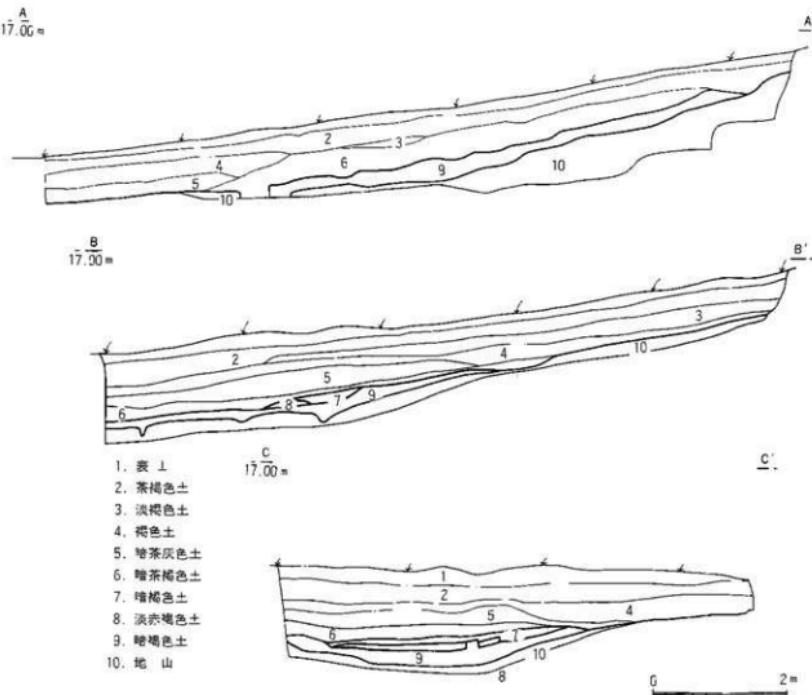
D地区では分布・試掘調査の際に試掘T-8からピットが8穴検出されていた。そして調査の結果そのほとんどが深さ30cmにも満たず、深さ50cm以上のピットは2穴しかないことがわかった。またT-2やT-2拡張区からはピットは確認されなかったことにより、このピット群は住居址のような生活遺構に伴うものではないと思われる。このピットを検出した層が第6層の暗茶褐色土層であり（第14図）、その下から暗褐色土層が検出され、多くの遺物が出土したものの、住居址などの明確な遺構

7から土壌が2基、試掘T-8からピット（柱穴状遺構）が8穴検出されている。そのため調査ではC地区に試掘T-7に直行する形でT-1を、D地区には試掘T-8に並行する形でT-2を設定した。

土層の堆積状況はC地区が表土直下に地山と思われる赤橙色土層が堆積し、それより下層は風化岩を含んだ同様の層であった。D地区は風化岩を大量に含んだ褐色土層（地山）の上に暗褐色土層が最大で30cm前後堆積し、この層から多くの須恵器片や土師質土器片などが出土した（第14図）。この暗褐色土層は広範囲に広がるため、試掘T-8の南側を拡張しT-2拡張区として調査を行い、その結果、両地区とともに明確な遺構は確認されず、遺物もD地区の暗褐色土層中からの出土以外は表土中から須恵器片などが数片出土しただけであった。

(1) 遺構について

C地区では分布・試掘調査の際に試掘T-7で土壌が2基検出されていたが、調査の結果、深さが10cmにも満たず双方の土壌がつながることがわかった。この付近に自然の水路のようなものがあり、これも恐らく同様のものと思われる。C地区は東側に緩やかに伸びる舌状の丘陵地であるが、3方向（北・南・東側）が既に削平されており、近年まで畑に使われていたと思われる。



第14図 T-2、T-2拡張区、試堀T-8土層堆積図

は検出されず、上方から流れ込んだような堆積状況をしている。よってこの暗褐色土層は遺構に伴うものではなく、遺物包含層と思われる。

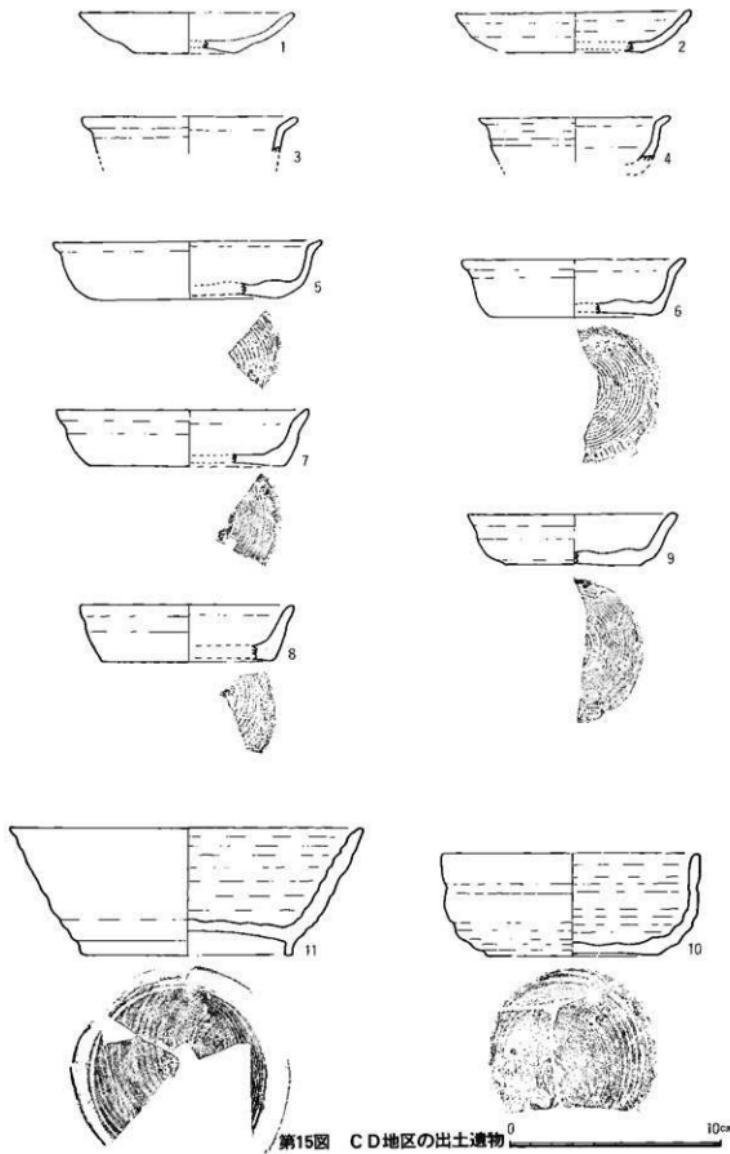
(2) 遺物について（第15図）

C地区では十師質土器片が3片、陶器片が1片出土した。十師質土器はいずれも口縁部片だが小片であり詳細は不明である。陶器片は地元産の布志名焼の碗の胸部片と思われる。C地区は近年まで畑などの耕作が行われていたことから、その時の入りこんだものと思われる。

D地区では第6層の暗茶褐色土層までは出土数が少なく、須恵器片や十師器片の小片のみの出土であったが、第9層の暗褐色土層からは須恵器の环身を中心に多く遺物が出土した。ここではD地区の第9層から出土した遺物を中心に紹介する。

A. 土師質土器（第15図-1）

口縁部から底部にかけての破片で、口径は10cm、底径6.2cm、器高4.6cmを測る。胎土は白色砂粒や小石が混じるもので緻密である。しかし焼成は悪く柔らかく摩滅が激しい。そのため成形痕・調整痕



1・2. 土師質土器、3~11. 須恵器

は不明瞭だが、底部外面に回転糸切り痕が残っている。また色調も淡褐色をしている。

B. 土師質土器（第15図-2）

口縁部から底部にかけての破片で、口径11cm、底径6.2cm、器高1.9cmを測る。胎土は白色砂粒や小石が含まれるもので緻密である。しかし焼成は不良で柔らかくその上磨耗が激しく、そのため成形痕や調整痕が不明確である。色調は淡褐色を呈する。

C. 須恵器（第15図-3）

壺の口縁部から底部にかけての破片で、口径12.6cm、底径10.4cm、器高2.7cmを測る。胎土は白色砂粒などをわずかに含むが緻密で焼成も良好、堅密で、色調は灰色を呈する。しかし器壁の断面を見るとその中心部には淡茶褐色が見られる。口縁部・体部の内外面の回転ナデ調整が、体部下外面と底部内面に多方向のナデ調整がそれぞれ施されている。また底部外面には回転糸切り痕が残っている。そして口縁部内面にわずかだが油煙痕もしくはタール状の付着物が見られる。

D. 須恵器（第15図-4、図版33）

壺の口縁部から底部にかけての破片で、口径11.8cm、底径9cm、器高2.7cmを測る。胎土は白色・黒色砂粒を含んでいるが緻密である。焼成はあまりよくなく、色調は赤褐色を呈する。回転ナデ調整が施されているが全体的に調整は雑である。そして体部の上と下とではナデ調整の痕跡の目の大きさが異なり、下の方が目が荒い。また底部外面は回転糸切り痕が見られる。内外面とでは色が異なり内側では斑点状になっている。

E. 須恵器（第15図-5、図版35）

壺の口縁部から底部にかけての破片で、口径10.4cm、底径9.6cm、器高3.7cmを測る。胎土は若干荒く、白色・黒色・ガラス質の砂粒を含み、小石が表面に浮き出ている。焼成は比較的良好で堅く、やや白っぽいものの灰色を呈している。回転ナデ調整が施されて、底部外面に回転糸切り痕が見られる。口縁部に油煙痕あるいはタール状の付着物が見られる。

F. 須恵器（第15図-6）

壺の口縁部片で口径9cmを測る。胎土はやや荒く白色砂粒などを含んでいる。小石が表面に浮き出ている。焼成は比較的良好で堅く、色調も灰色をしている。回転ナデ調整が施されている。

G. 須恵器（第15図-7）

壺の口縁部片で口径は10cmを測る。胎土は少し荒く、白色や黒色の砂粒を若干含んでいる。焼成は良好で堅く色も灰色を呈する。口縁部内面に油煙痕もしくはタール状の付着物が見られ、体部外面にも同様のものが見られる。

H. 須恵器（第15図-8）

壺の口縁部から底部にかけての破片で、口径は12cm、底径は8cm、器高は4.8cmを測る。胎土は白色・黒色砂粒などを含んでいるためやや荒く、小石が表面に浮き出している。焼成は非常に悪いため柔らかく摩減が激しい。色調も赤褐色を呈する。摩減が激しいため、成形痕・調整痕は不明瞭だが、底部外面の回転糸切り痕は明確に残っている。

I. 須恵器（第15図-9、図版37）

环の口縁部から底部にかけての破片で、口径10cm、底径6.4cm、器高2.4cmを測る。胎土は白色・黒色・ガラス質などの砂粒をわずかに含んでいるが緻密である。しかし焼成は劣悪で柔らかく磨耗が激しく、そのため成形痕や調整痕は見分けがつきにくい。色調は赤褐色をしている。

J. 須恵器（第15図-10、図版36）

环で半分は欠損しているもののほぼ全体の形状を残している。口径は12cm、底径は8cm、器高は4.8cmを測る。胎土はやや荒く、白色・黒色・ガラス質などの砂粒を多少含んでいる。焼成はあまりよくなく、いわゆる“生ま焼け”と思われるような状態で、やや白っぽい灰色を呈する。そのため柔らかく磨耗が激しいものの、調整痕などは比較的よく残っており、回転ナデ調整が施された底部外面には回転糸切痕が見られる。

K. 須恵器（第15図-11、図版38）

ほぼ完計に近い环で、口径は16.4cm、底径は10cm、器高は6cmを測る。胎土は白色・黒色・ガラス質などの砂粒や小石を含んでいるため若干荒く、その小礫は表面に浮き出ている。焼成は良好で堅緻、色調は灰色を呈する。体部には回転ナデ調整が、また底部内面は多方向のナデ調整が施されている。そして底部外面には回転糸切り痕、貼付高台が見られる。

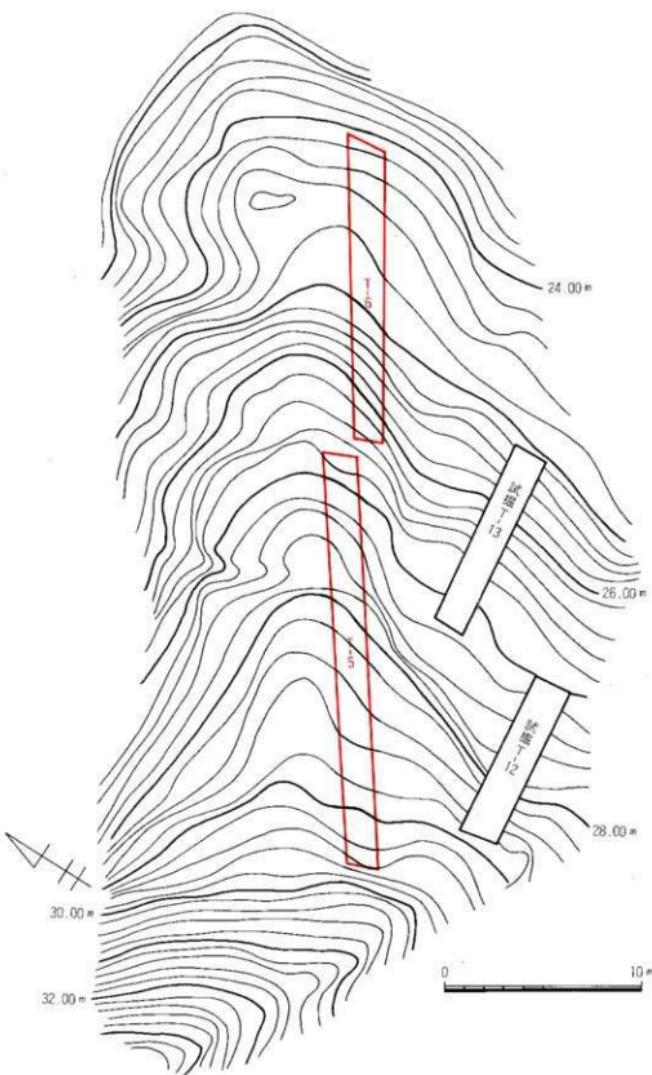
以上のように回転糸切り痕のある环や高台付の环がほとんどを占めている。現在、段状を呈する地形が調査区の東側の斜面上部で認められることから、以前に生活関連遺構のようなものが存在し、それが後世の耕作等による削平を受けて消滅してしまったと思われる。即述した遺物は遺構時、あるいは削平などを受けたときに流れ込んで溜まったものと判断できる。

3. E F 地区の調査の概要（第15・16・17図、図版11・12）

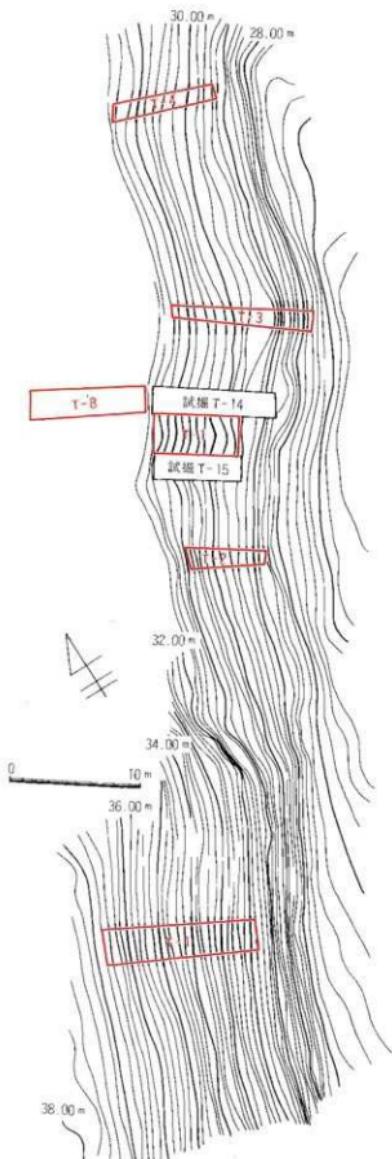
E F 地区は広さは約54m × 27m、標高23m～33mの緩傾斜のE地区<①>（第16図）と、広さ約88m × 24m、標高17m～38mのF地区（第17図）に分けられ、さらにF地区は標高28m～38mの急傾斜地<②>と標高27m～32mの緩傾斜地<③>に分けられる。

①は所々平坦地があり、北東側に延びる舌状台地でこの地形を継続する形でT-5・6を設定した。また②は、分布・試掘調査の際、斜面上部の尾根づたいから遺構が確認されなかったために、遺構の有無の確認のためT-1を設定した。③は斜面頂上部に平成5・6年度の調査で柴尾遺跡（石器製作址）や柴尾古墳群（1～3号墳）が確認されているため、それらの遺跡との関連等も考慮に入れながらT-2～4、T-8・9を設定した。

土層の堆積状況は③の付近では表土直下が地山と思われる赤橙色土層である。①・②はやや複雑ではあるが大まかには黄灰色または黄褐色土がかなり厚く堆積しているのが見られる。また場所によつてはマンガンと思われるような鉱石などを含んだ層も見られる。そしてその下に基盤と思われる風化岩を大量に含んだ赤橙色または赤褐色土層が堆積している。



第16図 E地区地形測量及び調査成果図



第17図 F地区地形測量及び調査成果図

(1) 遺構について

E地区では遺構は確認できなかった。F地区では分布・試掘調査の際に試掘T-14で溝状遺構(SD-01)が、試掘T-15からは加工段と思われる段状遺構が検出されていた。そこで試掘T-14・15の間にT-9を設定し遺構の追跡を行った。しかしSD-01はT-9のほぼ中央で消滅し、段状遺構も明確な形がなく、不定形であることから自然的な地形の変化と考えた。またそのほかのトレンチからも遺構は検出されなかった。

(2) 遺物について(第18図)

このE・F地区では当初、柴尾遺跡や柴尾古墳群との関係が考えられていたが、調査の結果、遺構は確認されず、遺物もごく少数であった。主な出土遺物は石器・須恵器片・土師器片・黒曜石の剥片である。大半の須恵器片や土師器片については小片で摩滅が激しいので詳細は不明である。

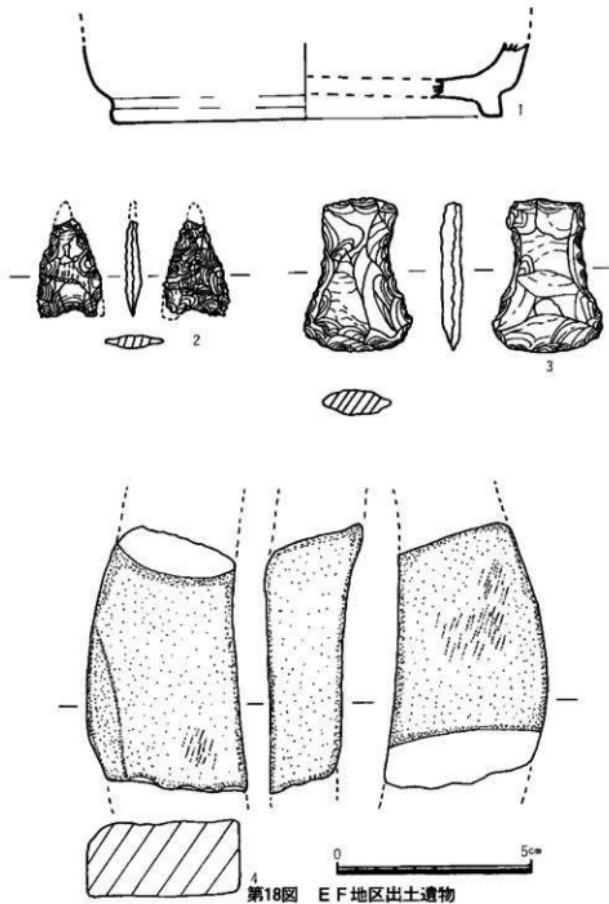
A. 須恵器(第18図-1)

T-5から表土層から出土した壺の底部片で、底径10cmを測る。胎土は白色・黒色・ガラス質の砂粒を含むが緻密であり、焼成も良好である。色調は灰色を呈するが、器壁の断面中心部には茶褐色が見られる。回転ナデ調整が施され、底部には回転糸切り痕、貼付高台が見られる。

B. 石器(第18図-2)

T-7の表土層から出土した黒曜石製の石鎚で、わずかに先端部と脚部が欠損しているものの遺存度は良好である。現存で最大長2.5cm、最大幅2.5cm、最大厚0.6cmを測る。両側縁は押圧剝離による交互剝離で非常に細かい加工が施されて、基部には抉りがわずかに見られる。

C. 石器(第18図-3)



第18図 E F地区出土遺物

試掘T-14の第3層から出土した安山岩製と思われるミニチュアの打製石斧で、^模型を呈する。遺存度は良好ではほぼ完形に近く、最大長3.9cm、最大幅2.8cm、最大厚0.6cmを測る。刃部と両側縁部には交互剥離による細かい加工が施されている。中央部のくびれた部分には装着痕は見られず、刃部にも使用痕などは認められない。

D. 石器（第18図-4）

試掘T-14のS D-01と思われた床面から出土した砥石で半分以上欠損している。そのため現存で最大幅3.95cm、最大厚2.7cmを測る。石質は非常に柔らかく、泥岩もしくはそれに近い極細粒砂岩と思われる。形態はわずかに弧を描くように曲がっており、両面には細かい擦痕が見られる。

4. 小 結

以上のように平成7年度の調査は、平成5・6年度の調査と比べると遺構も遺物も少ない。また遺物の時期に關しても古墳時代の遺物が中心であった平成5・6年度に比べ、平成7年度では奈良・平安時代の遺物が中心であった。また平成6年度に縄文時代前期の、平成7年度に縄文時代晚期の土器片がそれぞれ1片ながら出土したが、古墳以外の明確な遺構は確認されておらず、住居址や集落址といった生活遺構は確認されなかった。これらのことから断片的ではあるが、この丘陵地一帯では縄文時代から平安時代まで、連綿として人間が生活を営んでいた可能性を否定できないと思われる。

今後周辺の遺跡の調査が進むにつれて、この丘陵地一帯の歴史的環境・特性・状況、特に柴尾古墳群が存在した前後の時代（縄文時代や奈良・平安時代）のことが鮮明になることを期待したい。

〔註〕

- (1) 島根県埋蔵文化財センター足立克己・柳浦俊一両氏の御教示による

V. 柴尾古墓

1. 調査の概要

平成6年度に行われた分布調査において五輪塔が発見され、「柴尾古墓」と命名された。五輪塔は柴尾4・5号墳のある丘陵地の北側の丘陵地に存在する（第4図）。丘陵地は広さ約20m×24m、標高24m～26.6mの小高いマウンドをもつ丘陵地である（第19図）。北側と東側は完全に削平され、西側には山道が通っている。

調査は当初4方向に調査トレーンチ（試掘溝）を設定し、遺構の有無・土層の堆積状況の確認から行った。遺構は調査トレーンチ内では確認されなかったが（第20図）、丘陵地の西側から土壌が11基検出された（第21図）。土層の堆積状況は表土直下が風化岩を大量に含んだ赤橙色土層（地山）であった。

調査の結果、分布調査の際に発見された五輪塔（SX-01）以外に表土直下からもう1基の五輪塔（SX-02）が発見された。しかし遺物は表土中から土師器片と土師質器片が数片だけ出土した。

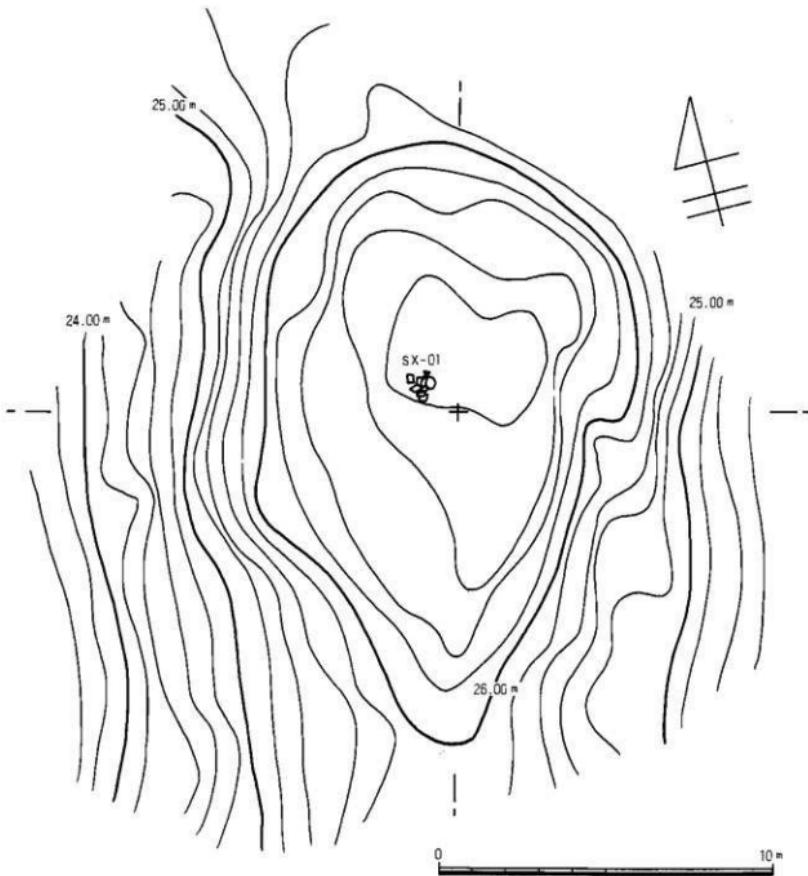
2. 遺構について

- (1) 五輪塔群

A. SX-01（第22図、図版19）

分布調査の際に発見されたもの。当初は基壇と思われた石の上に火輪、その上の半分欠損した火輪が乗った状態で検出され、空風輪や火輪が破片で検出された。調査は実測後これらの石を取り除き、基壇の有無やその他の関連する遺構の確認を行った。

調査の結果、基壇と思われた石は風化がはげしい火輪であった。その他の遺構は検出されなかった。

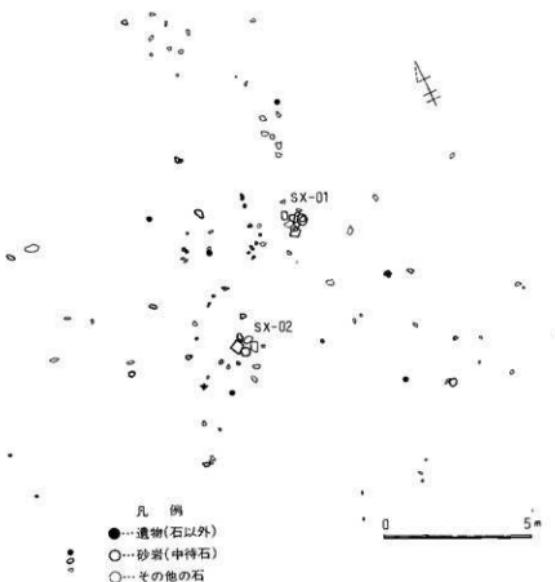


第19図 柴尾古墓地形測量図

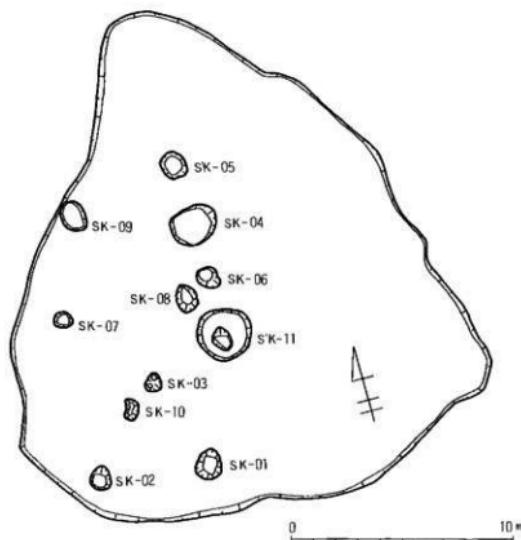
五輪塔は空風輪1、火輪3、水輪1が出土し、いずれも来待石（凝灰質砂岩）であった。五輪塔以外の石は大海崎石（安山岩）であった。これらの五輪塔がセット関係であるかは不明である。

B. SX-02 (第23図、図版20)

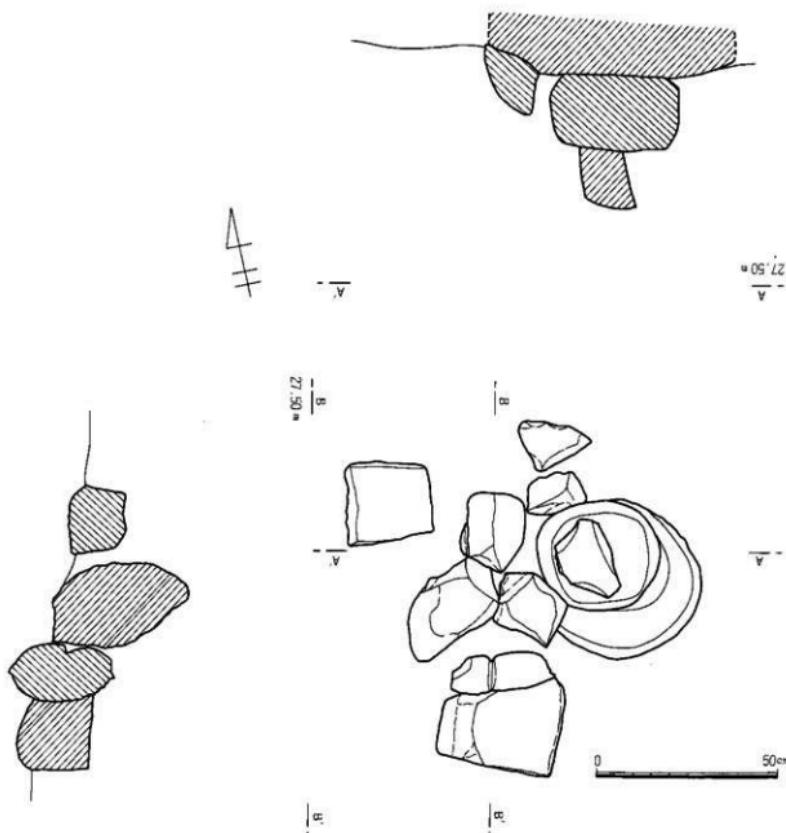
丘陵地の中央のやや南側、表土直下から発見された。SX-01のように積み重ねられた状態ではなく、平面的に崩れた状態で発見された。調査の結果、空風輪・火輪・水輪が1点ずつが出土した。いずれも来待石製で、おそらくセット関係であると思われる。



第20図 遺物等出土状況図



第21図 柴尾古墓調査成果図



第22図 SX-01実測図

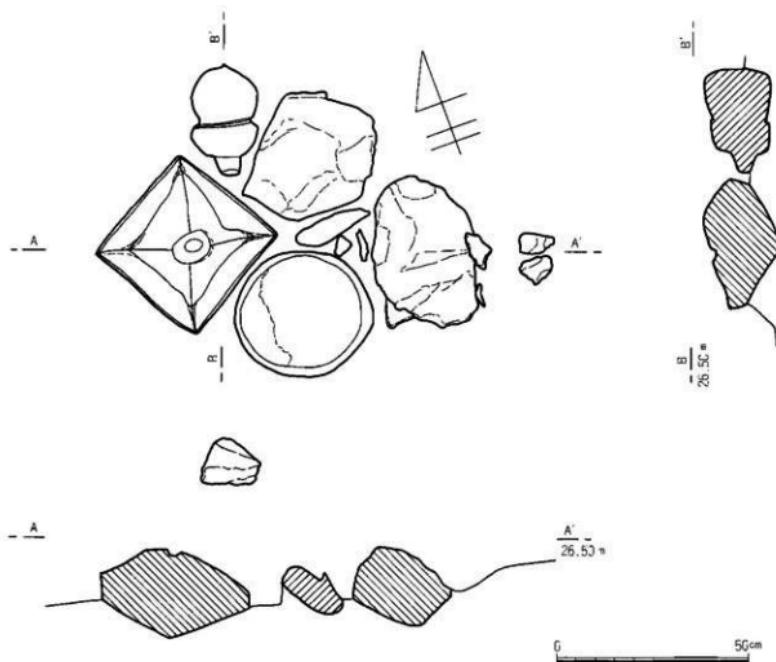
実測後、これらの石を取り除いて関連遺構の検索のために深掘りを行った。その下から隅丸長方形状の土壙が1基（SK-11）検出された（第24図）。しかしSX-02やSK-11から共伴する遺物が出土しなかったため、時期やこの両者の関係については不明である。

(2) 土壙群

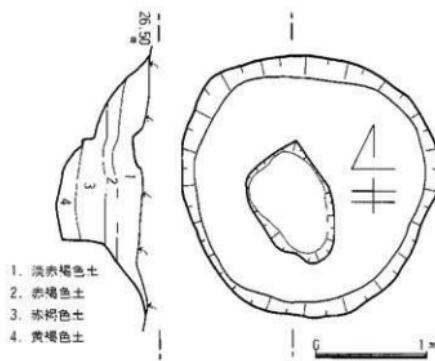
丘陵地の西側の頂上部から裾野にかけて、表土面からわずかに窪んだところが数ヶ所確認され、調査の結果、土壙が11基検出された。どの土壙も床・壁が加工されているが、遺物は出土しなかった。

A. SK-01（第25図、図版21）

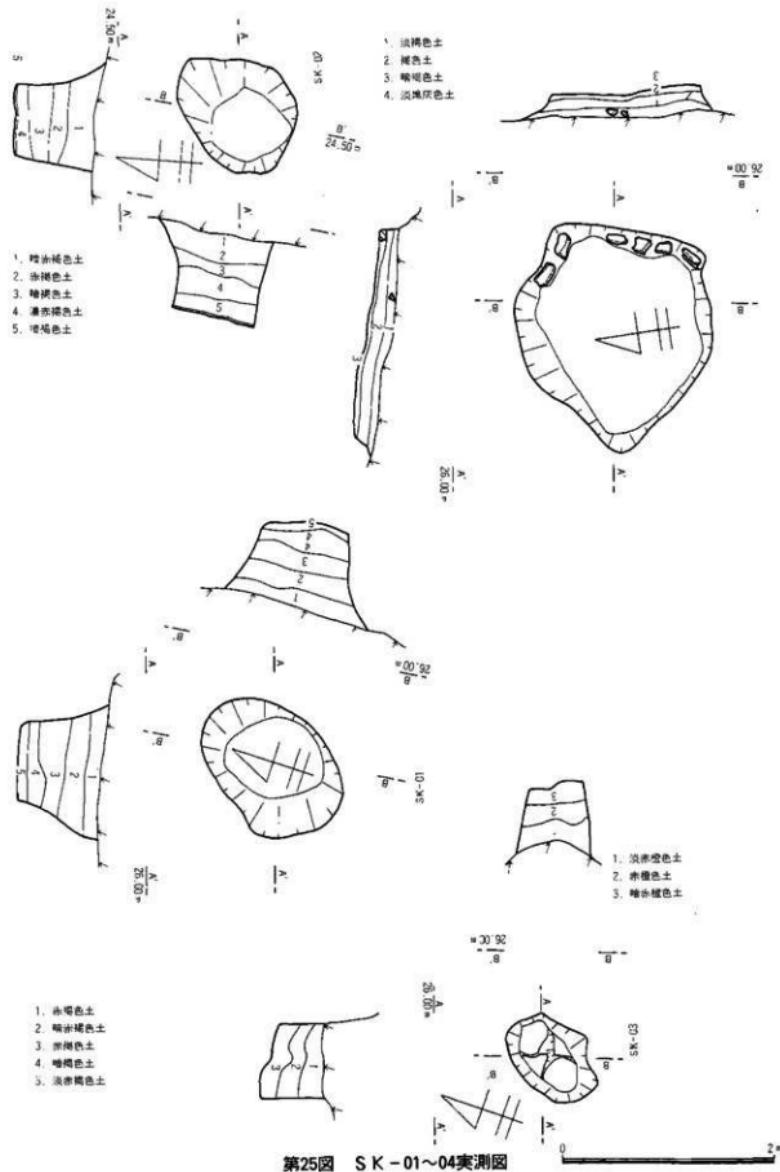
丘陵地の頂上部の南側から検出された。上端は直径東西約140cm、南北約100cm、下端は直径約東西約76cm、南北約90cmの橢円形状、深さ約80cmの円筒形を呈する。表土から切りこまれている。覆土は一



第23図 SX-02実測図



第24図 SK-11実測図



第25図 SK-01~04実測図

応に柔らかくボソボソしている。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、上端付近で広がっている。これは風化によって拡大したものと思われる。

床面直上から、竹と思われる炭化物が敷かれたような状態で検出され、その上には明灰色の粘土が薄く敷かれたような状態で検出された。しかしこれが何を意味するかは不明である。出土遺物はなし。

B. SK-02 (第25図、図版22)

丘陵地の南、西側斜面に位置し、SK-01の西側にあたる。上端の直径は東西約100cm、南北約110cm、下端の直径は約70cm、深さ約80cmを測り、円筒形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上端付近は風化によってやや拡大したと思われる。覆土は一応に柔らかいが、覆土第5層の暗褐色土層から炭化物を含んだ層が検出された。遺物はなし。

C. SK-03 (第25図、図版23)

丘陵地の南、西側斜面の中央に位置する。上端の直径は東西約60cm、南北約96cmの不整橈円形を呈する。下端は双凹形で一方は直径約35cm、他方は直径約30cmを測る不整凹形を呈する。覆土は一応に柔らかく、判別しにくい。出土遺物はなく木の根の搅乱の可能性がある。

D. SK-04 (第25図、図版24)

丘陵地の頂上部のやや北側に位置し、SX-01の西側にあたる。上端の直径は東西約210cm、南北約180cm、下端の直径は東西約170cm、南北約100cm、深さ約30cmを測り、逆台形を呈する。覆土第1層から比較的大きな石が数点出土したが、SX-01とは無関係と思われる。床面は平らだが、壁は東側には大きな木の根がありその搅乱の影響で壁が不明瞭になっている。また西側は急斜面であり、恐らく風化によって上端の形が崩れたものと思われる。

E. SK-05 (第26図、図版25)

丘陵地の北側斜面に位置し、SK-04の北側にあたる。上端の直径は約130cm、下端の直径は80cmの不整凹形状、深さ80cm～100cmを測る円筒形状を呈する。床は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。しかし北側が急斜面になっているため、上端の形の影響を与えていると思われる。覆土は風化岩を含んでいるが、非常に柔らかい。遺物は出土しなかった。

F. SK-06 (第26図、図版26)

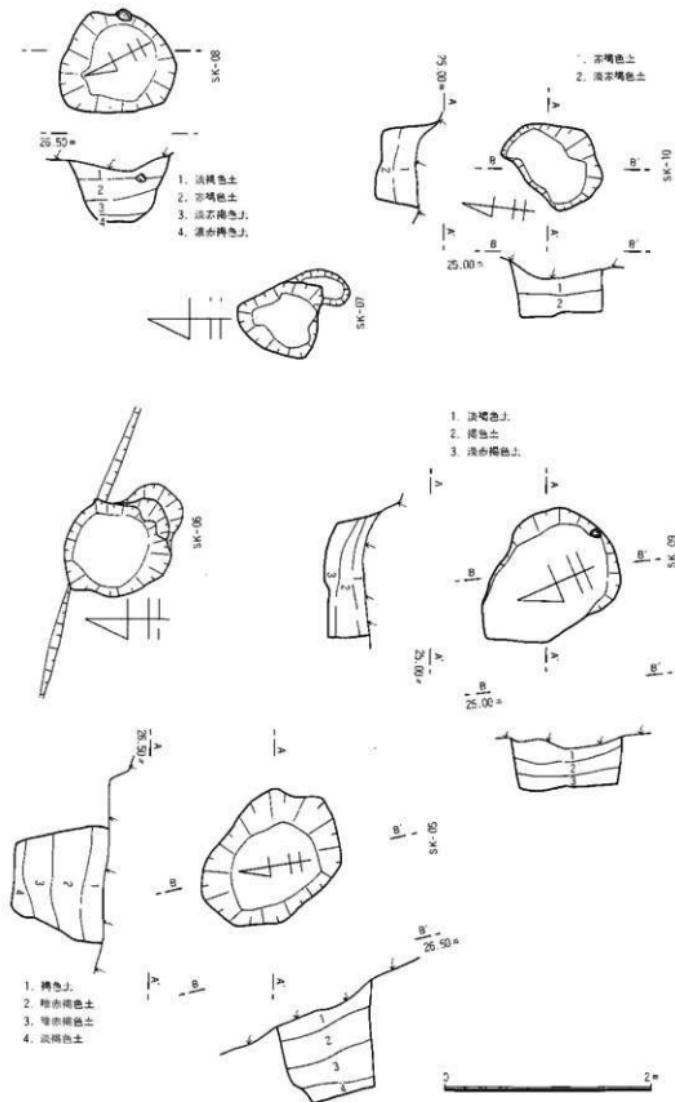
丘陵地の頂上部のやや西側に位置し、SK-04に南側、SX-01の南西側にあたる。上端の直径は約90cm、下端の直径は約70cmを測り、深さ100cmを測る円筒形を呈する。床は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、南西側に木の根があり搅乱を受けている。出土遺物はなかった。

G. SK-07 (第26図、図版27)

丘陵地の西側斜面の崖野に位置する。上端の直径は約100cm、下端の直径は75cm、深さは約60cmを測る円筒形を呈する。床は平らで、壁は垂直に立ち上がっている。出土遺物はなかった。

H. SK-08 (第26図、図版28)

丘陵地の頂上部のやや西側に位置し、SK-06の西側にあたる。上端の直径は約100cm、下端の直径は約75cm、深さは約60cmを測る円筒形を呈する。床は平らだが、壁はややなだらかに立ち上がっている。覆土第2層から空風輪と思われる破片が出土した。



第26図 SK-05~10実測図

表1 柴尾古墓検出の土壤一覧表

規 模	上端(長~短)cm 下端(長~短)cm	形 態	深さ(cm) (形態)	出 土 遺 物	備 考	捕 図 番 号 図版番号
SK-01	140~100 92~76	不整楕円形 〃(円筒形)	80 70	なし	床面頂上に竹と思われる炭化物が散在している。その上に粘土が薄く堆積している。	第25図 図版21
	110~100 70	不整円形 (円筒形)	70	なし	床面直状の覆土第5層の暗褐色土層から炭化物を含んだ層が検出された。	第25図 図版22
SK-03	96~60 35~30	不整楕円形 双円形(円筒形?)	70	なし	上端はいつの穴だが、底は双円を呈し、テラス状の段で区切る。木の根の擾乱の可能性あり。	第25図 図版23
	210~180 170~100	不整楕円形 〃(逆台形)	30	なし	覆土1層からやや大きめの右が出土したが、SK-01とは無関係と思われる。	第25図 図版24
SK-05	130 80	不整円形 〃(円筒形)	80~100	なし	斜面の影響で上端が若干削られている。風化岩を含んだ覆土有層で、非常に柔らかい。	第26図 図版25
	90 70	不整円形 〃(円筒形)	100	なし	東側の壁が木の根によって崩されている。	第26図 図版26
SK-07	100 75	不整円形 〃(円筒形)	60	なし		第26図 図版27
	100 75	不整円形 (円筒形)	60	五輪塔(空風輪) 覆土第2層	覆土第2層から五輪塔の一部の空風輪と思われる破片が出土。	第26図 図版28
SK-09	150~110 140~120	不整楕円形 〃(円筒形)	50	なし		第26図 図版29
	100~40 80~40	不整楕円形 〃	40	なし	床面が凸凹しており、木の根などの擾乱の可能性がある。	第26図 図版30
SK-11	上段 410 350	不整円形 〃(逆台形)	35		SX-02の直下から検出された。二段割りと思われるが、上段にはやや不明確な点がある。	第24図 図版31
	下段 180~100 160~90	不整隅丸方形 (筒形)	60	なし	下段部は床面は平らで堅もほぼ垂直に立ち上がっている。	図版32

I. SK-09(第26図、図版29)

丘陵地の西側斜面の裾野に位置し、SK-07の北側にあたる。上端の直径は東西約110cm、南北約150cm、下端の直径は東西約120cm、南北約140cmを測る楕円形状を呈し、深さ約50cmを測る円筒形である。床は平らで壁は垂直に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

J. SK-10(第26図、図版30)

丘陵地の南、西側斜面の中央に位置し、SK-03の西側に位置する。上端の直径は長径約100cm、短径約40cm、下端の直径は長径約80cm、短径約40cmの不整楕円形状を呈する。深さは約40cmを測る。床面は凸凹し、覆土も柔らかいため木の根などによる擾乱の可能性がある。出土遺物はなかった。

K. SK-11 (第24図、図版31・32)

丘陵地の頂上部の南側のやや平坦地にあったSX-02の下から検出された。形態は二段掘りされていくと思われるが、下段部に比べ、上段部は壁がややあいまいな点が多い。現状では上段部の上端の直径は約400cm、下端の直径は350cmを測る円形状、下段部は長軸約180cm、短軸約100cmを測る隅丸方形形状を呈する。これがSX-02に伴う“上墳墓”であるかは不明である。

これらの土壤には以下のような共通点が挙げられる。

- すべて丘陵地の西側斜面に集中している。
- 床面が平らで、壁がほぼ垂直に立ち上がっている。
- 形態はSK-11以外が不整円形もしくは不整橢円形を呈している。
- 共伴遺物がない。
- 覆土が一応柔らかい。

以上のように共通した特徴を持っているが、遺物が出土しなかったため、時期や性格についての詳細は不明である。

3. 遺物について

本遺跡から五輪塔以外には土師器片と土師質土器片が数片ずつ出土した。

A. 土師器 (第27図-1)

東側斜面の表土中から出土した壺型の土師器の口縁部から頸部にかけての破片で、口径は24.8cmを測る。胎土は白色・黒色・ガラス質の砂粒を含んでいるためやや荒く、焼成もあり良くなく、表面の肌触りが悪い。調整痕などの詳細は表面の摩滅が激しいため不明である。形態的特徴から鹿島町の南講武草田遺跡の草田4～5期の相当するものと思われる¹⁶。

B. 土師質土器 (第27図-2)

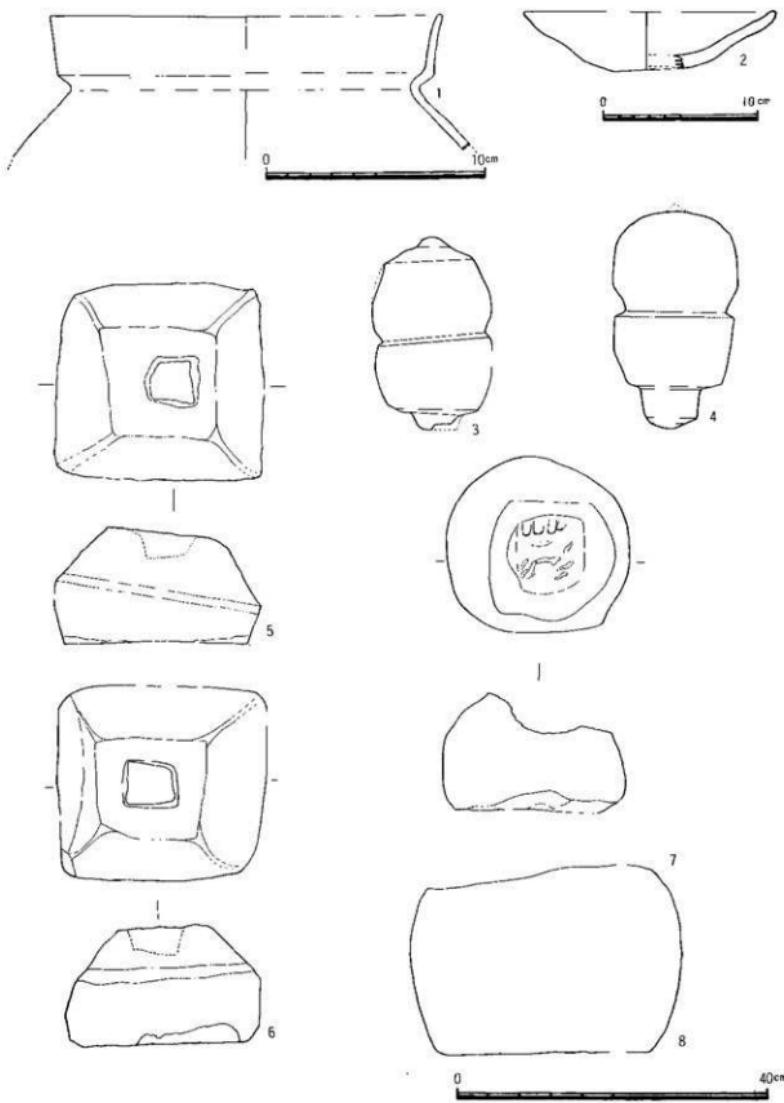
西側斜面の表土中から出土した上師質土器の口縁部から底部にかけての破片で、口径6cm、器高1.4cm、底径2cmを測る。胎土は白色・ガラス質の砂粒を含んでいるが緻密である。しかし焼成はあまり良くなく、軟質で磨耗が激しいため調整痕など詳細については不明であるが、形態的特徴から16世紀代の手づくね製のものと思われる¹⁷。

C. 五輪塔<空風輪> (第27図-3)

西側斜面の表土中から出土した空風輪で、現高で24.6cmを測る。空輪部は高さ12.9cm、最大幅15.1cm、くびれ部では13.1cmを測る。風輪部では高さ9.1cm、最大幅14.8cm、下面幅10cmを測る。ホゾは先端部が欠損しているが、長さ3.1cm、基部は6.5cmを測る。全体的に丸みを帯び、どっしりとした感がある。くびれは明確だが、平行になっていない。

D. 五輪塔<空風輪> (第27図-4、図版40)

SX-02から検出された空風輪で、やや頂上突起が欠損しているが現高は27.9cmを測る。空輪部では現状で高さ12.9cm、最大幅15.7cm、くびれ部では12.8cmを測る。風輪部は高さ9.6cm、最大幅14.9cm、下面幅11.9cmを測る。ホゾは長さ5.9cm、基部幅8.3cmを測る。空輪部はわずかに丸みを持つが、風輪



第27図 柴尾古墓の出土遺物

部は直線的な表現になっている。また風輪部に直径約2~2.5cmほどの穴がいくつか見られるが、風化によるものなのか、人為的なもののかは不明である。

E. 五輪塔<火輪>（第27図-5）

S X - 01から出土した火輪で、高さ15cm、幅25cm、軒口の厚さは4.6~5cmを測る。軒口は両端部に向けてわずかに反り上がり、降棟も緩やかな流れである。中央には空風輪を差し込む“ホゾ穴”があり、6~6.5cmを測る方形状をしている。これは当初は円形だったのが、使用時あるいは風化によって形が崩れたものと思われる。

F. 五輪塔<火輪>（第27図-6、図版39）

S X - 02から出土した火輪で、高さ15.3cm、幅25cm、軒口の厚さは7.8cm~8.6cmを測る。これもD.と同様の形態をしている。

G. 五輪塔<水輪?>（第27図-7）

西側斜面の表土中から出土したもので、形態から恐らくは水輪と思われる。現状では高さ15cm、最大幅23.4cm、上面幅16cm、下面幅18cmを測る。上面には鑿のような工具によって加工されたような跡が残っている。ややはかの水輪と比べて背が低い。

H. 五輪塔<水輪>（第27図-8、図版42）

S X - 01から出土した水輪で、高さ24cm、最大幅34.5cm、上面幅28.8cm、下面幅26cmを測る。ほぼ左右対称で最大幅も中央部で測れる。球体の上面・下面を均等に切り取った太鼓胴形を呈する。比較的背が高く、肩が張ったような感じで安定感がある。

これら以外の五輪塔は破片で出土している。調査の結果、空風輪3、風輪?1、火輪5、水輪4、不明5が発見され、地輪は全く出土しなかった。不明分は風化が激しく形もわからないが五輪塔の一部の可能性があるものである。本遺跡の五輪塔の特徴を部位別に挙げると以下のようになる。

- 空風輪は一石で造られているのがほとんどであり、空輪と風輪はほぼ同様である。全体的に丸みを帯びている。空輪の頂上の突起は不明確だがわずかに認められ、「宝珠形」を呈している。
- 火輪は屋根の先端部（軒口）の反りがわずかに認められる。降棟下の横線にはほとんど反りがなくまっすぐで、軒端もわずかに外側に向かって反り上がっている。
- 水輪は球体の上・下面是均等に切り取った太鼓胴形を呈する。比較的背が高く肩が張った感じがあり、安定感がある。
- 石質はすべて來待石製で、風化が激しい。

4. 小 結

本遺跡の五輪塔自体は、松江市周辺の地域的な編年を考慮に入れなければならないが、現在のところは困難である。あえて本遺跡の五輪塔の形態と類似した加茂町の神原五輪塔遺跡³⁰や伯太町の安井閑にある五輪塔³¹や一般的な編年³²を参考にすると、室町時代後期から安土・桃山時代に当たると思われる。

このように五輪塔は古いものと思われるが、これが土壇群とどのような関係にあるのかは不明である。また五輪塔自体が最初からこの丘陵地にあったのか、それとも移築されてきたのかも不明である。

いずれにしても本遺跡だけでは結論付けられないので、周辺での調査事例の増加に期待し、その上で再度検討を加えたい。

【註】

- (1) 鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備始業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』 1992
- (2) 島根県教育委員会文化課文化財保護係主事広江耕史氏の御教示による
- (3) 蓬岡法 「加茂・神原五輪塔」
『島根県埋蔵文化財調査報告書 第Ⅲ集』 島根県教育委員会 1971
- (4) 間野大丞 「五輪成出土の石塔群について」『松江考古 第8号』 松江考古学談話会 1992
- (5) 土居託児 『石塔の民俗』 岩崎美術社 1972

ま　と　め

ここで平成5年度から平成7年度に行われた柴尾遺跡・柴尾古墳群・柴尾古墓の調査の概要について若干ふれておきたい。

1. 遺構について

柴尾古墳群は1号墳～6号墳まで検出された。いずれも規模が10m前後と小規模の方墳で、出土遺物や形態などその他さまざまな特徴から前期中心の古墳群と思われる¹⁹⁹²。本古墳群のある持田・川津平野周辺の前期古墳としては道仙古墳群¹⁹⁹²などがあるが、数が少なくいずれも1辺10m前後の小規模の古墳が多いが、中期以降になると數・規模の面でも増大してくる。そのような流れのなかで、本古墳群がどのような役割を果たしてきたのか、今後の検討課題であろう。

柴尾遺跡・柴尾古墓から計17基の土壙と1基の集石遺構が検出された。17基の土壙のうち5基が“石器製作址”的ある丘陵地から、11基の土壙は柴尾古墓のある丘陵地からそれぞれ検出された。出土遺物が少ないかあるいは全く出せせず、そのため時期や性格については不明であり、また住居址のような生活遺構も検出されなかった。

2. 遺物について

縄文土器は計5片出土した。そのうち早期の土器片が4片で、晩期の土器は1片である。早期の土器は荒い条痕が内外面に施されているが、晩期の土器についての詳細は不明である。

上師器は小谷式のものが多く見られるが、柴尾2号墳の周溝からはこの周辺では見られないタイプ

の土師器が出土した。このタイプは鳥取県東部によく見られる口唇部が肥厚したり、頸部に凸帯が張りつけらるもので、この時期鳥取県東部とこの周辺の関係について注目されるものである。

須恵器は平成5・6年度の調査ではあまり出土せず、出土した須恵器も甕の破片がほとんどであった。しかし平成7年度の調査においてCD地区を中心に多くの須恵器が出土し、そのうち壺を分類すると次のようになる（第11・15・18図参照）。

- A 類…洞部下が膨らみ器高が低く口唇部が外反する皿形…（第15図-3～6）
- A-1 類…器高が低いが口唇部があまり外反しない皿形…（第15図-7～9）
- B 類…無高台の碗形…（第11図-3、第15図-10）
- C 類…低い高台をもつ碗形…（第11図-3・5、第15図-11、第18図-1）

いずれも底部外面に回転糸切り痕を持つ。A類やA-1類などは四王寺跡などからも出土しており、油煙痕らしき黒色有機物質が付着しているため灯明皿ではないかと考えられる¹⁶。また形態や技法的な特徴から8世紀中頃から9世紀中頃のものと思われる。

石器は石鎚が21点、スクレイパーが8点、敲石、砥石、石核転用石器などが出土した。なかでも石鎚は20点が黒曜石製で、分析結果から隠岐産の黒曜石が使用されている。また勾玉のヒスイは糸魚川産であり、原産地との交易が考えられる¹⁷。石鎚の形態分類としては以下のように分類される¹⁸。

- A 類…平基無茎鎚（基部が平らで茎がないもの） …… 2
- A-1 類…平基無茎鎚（形態は同じだが、全体的に長いもの） …… 1
- B 類…凹基無茎鎚（基部が窪んで茎がないもの） …… 2
- B-1 類…凹基無茎鎚（基部の窪みがわずかで、全体的に長い） …… 5
- B-2 類…凹基無茎鎚（基部の窪みが大きく脚が長く、全体的に長い） …… 8
- C 類…円基鎚（茎部の作り出しが不明確の基部に丸みをもつ） …… 1
- 形態分類不能 …… 2

これらの形態分類によって時期の特定は難しいが、人まかに言って縄文時代前期から後期にかけて多く見られる形態である¹⁹。

3. まとめ

以上のように柴尾遺跡・柴尾古墳群・柴尾古墓の調査について概観したが、柴尾古墳群以外は不明な点が多い。柴尾遺跡は“石器製作址”と想定されているが、集落の中の工房と考えるならば、石鎚に比して他の石器の数が少なく、剥片も少ない。また石器製作址遺跡においては未製品や失敗作品も多く出土するが²⁰、本遺跡からはこれらはほとんど出土せず、現時点からは大集落に伴う石器製作址とは考えにくい。おそらく大集落と有機的に結合している小集落あるいはベースキャンプ地（露営地）的なものに伴う製作址と考えられる²¹。それならば先場所（柴尾遺跡？）で石鎚を製作したとも考えられる。今後の集落研究において解明されなければならない問題ではあるが、幸いにも川津周辺には数多くの縄文時代の遺跡があり、これらとの有機的関係を探っていくばなんらかのヒントが得られる

のではないだろうか。

また本遺跡においての交易関係も注目される。黒曜石は隱岐、ヒスイは糸魚川産と原産地との交流が明らかになっている。特に黒曜石は分析結果から隱岐産がほぼ100%の使用頻度の結果が得られた（黒曜石の分析結果は計32点のうち、30点が隱岐産で2点が産地不明）。原産地とは原石との交換にはなんらかの交換物資が必要であり、その上で需要と供給の関係が成り立つ。原産地との交流は集落址を考える上で重要な問題点となってくる。

最後に遺跡全体の流れを捉えておきたい。まず縄文時代に柴尾遺跡が存在し、古墳時代にせってその上に柴尾古墳群が築かれた。それは古墳の盛土から多量の黒曜石の剝片が出土したり、古墳の墳丘基盤の下から縄文時代の石器や土器が出土したことからうかがえる。そして後世になって削平を受け、その上に土が盛られたと思われる。なぜならば、古墳自体の盛土がわずかしか確認されず、全く古墳とは異なる土が盛られていたことがあげられる。そして時を隔てること1000年近く、全くこれら2つの遺跡とは関係ない柴尾古墓が築かれた。恐らくこの周辺の村落があって、その村落を見渡せるような北側丘陵地に五輪塔を設置したと考える。

このように今後は特定の時代にとどまらず他の遺跡との有機的関係を根底とした集落址研究がなされるべきであると考える。そしてこの種の研究がさらに発展することを期待したい。

【註】

- (1) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
『柴尾遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 1994
- (2) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
『柴尾遺跡他発掘調査報告書Ⅱ』 1995
- (3) 岡崎雄一郎 「松江・道仙古墳群」『島根県埋蔵文化財報告週 第X集』 1983
- (4) 島根県教育委員会 「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅳ」 1985
- (5) 藤井哲男・東村武信「島根県内遺跡出土の勾玉の产地分析」「柴尾遺跡出土の黒曜石製造物の原产地分析」「柴尾遺跡他発掘調査Ⅱ」 1995
- (6) 戸沢充則編 「縄文時代研究事典」 東京堂出版 1994の「石器形態分類模式図」を参考にした
- (7) 鈴木道之助 「図録石器入門事典」 柏書房 1991
- (8) 鈴木次郎 「石斧の大量生産」『季刊 考古学 第12号』 雄山閣 1985
- (9) 後藤和民 「縄文時代における生産力の発展過程」『考古学研究 第29巻第2号』 考古学研究会 1982
- (10) 小田静夫 「黒曜石」『縄文文化の研究 第8巻』雄山閣 1982

図 版



図版 1 宮尾古墳群調査前遠景（南側から見る）



図版 2 宮尾古墳群調査前近景（南側から見る）



図版 3 宮尾 1号墳調査状況（北側から見る ベルトを残した状態）



図版 4 宮尾 1号墳完掘状況（南側から見る ベルトを取り除いた状態）



図版 5 宮尾 2号墳調査状況（南側から見る ベルトを残した状態）



図版 6 宮尾 2号墳完掘状況（南側から見る ベルトを取り除いた状態）



図版7 柴尾遺跡AB地区調査前全景（東側から見る）



図版8 柴尾遺跡AB地区調査前近景（南側から見る）



図版9 柴尾遺跡C地区調査前全景（北側から見る）



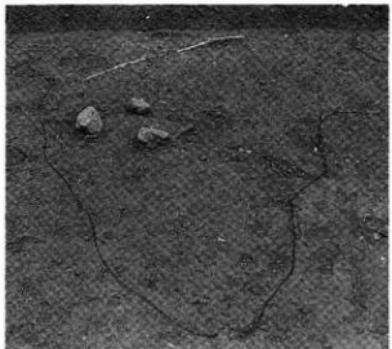
図版10 柴尾遺跡D地区調査前全景（東側から見る）



図版11 柴尾遺跡E地区調査前全景（南側から見る）



図版12 柴尾遺跡F地区調査前全景（南側から見る）



図版13 奈尾A・B地区 A-7グリッド SK-0の発出状況(東側から見る)



図版14 奈尾A・B地区 A-7グリッド SK-0の発出状況(西側から見る)



図版15 奈尾A・B地区 A-7グリッド SK-0の発出状況
(南側から見る)



図版16 奈尾A・B地区 B-7グリッド SK-0の発出状況(北側から見る)



図版17 奈尾A・B地区 B-7グリッド SK-0の調査状況(南側から見る)



図版18 奈尾A・B地区 B-7グリッド SK-0の調査状況(北側から見る)



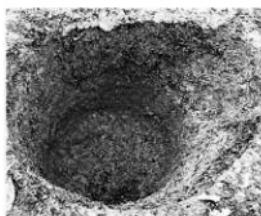
図版19 柴尾古墓 SX-01検出状況（北側から見る）



図版20 柴尾古墓 SX-02検出状況（南側から見る）



図版21 柴尾古墳 SK-01完堀状況
(南側から見る)



図版22 柴尾古墳 SK-02完堀状況
(北側から見る)



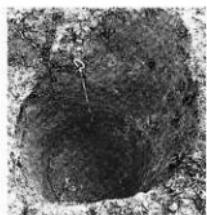
図版23 柴尾古墳 SK-03完堀状況
(西側から見る)



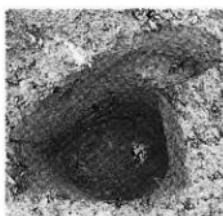
図版24 柴尾古墳 SK-04完堀状況
(南側から見る)



図版25 柴尾古墳 SK-05完堀
状況 (北側から見る)



図版26 柴尾古墳 SK-06完
堀状況(西側から見る)



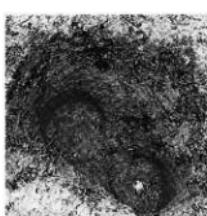
図版27 柴尾古墳 SK-07完堀
状況 (西側から見る)



図版28 柴尾古墳 SK-08完堀
状況 (北側から見る)



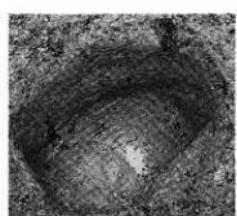
図版29 柴尾古墳 SK-09完堀状況
(北側から見る)



図版30 柴尾古墳 SK-10完
堀状況(西側から見る)



図版31 柴尾古墳 SK-11完堀状況遠景
(南側から見る)



図版32 柴尾古墳 SK-11完堀状況
近景 (南側から見る)



図版33 柴尾遺跡出土の須恵器（D地区出土）



図版34 柴尾遺跡出土の須恵器（A B地区出土）



図版35 柴尾遺跡出土の須恵器（D地区出土）



図版36 柴尾遺跡出土の須恵器（D地区出土）



図版37 柴尾遺跡出土の須恵器（D地区出土）



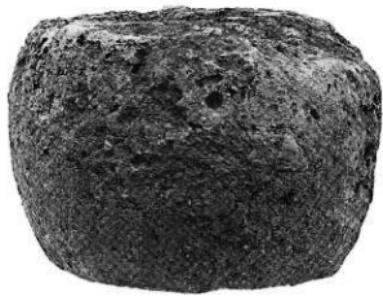
図版38 柴尾遺跡出土の須恵器（D地区出土）



図版39 柴尾古墓出土の五輪塔（S X - 02出土の火輪）



図版41 柴尾古墓出土の五輪塔（水輪）



図版40 柴尾古墓出土の五輪塔
(S X - 02出土の空風輪)

図版42 柴尾古墓出土の五輪塔（S X - 02出土の水輪）

宮尾古墳群他発掘調査報告書

1996年3月

発行 松江市教育委員会
松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷有限会社
松江市西川津町667-1